大　庭　遺　跡

―特別擁護老人ホームかたくりの里

建設に伴う発掘調査―

2002．3

長野県辰野町教育委員会

1. 第7号竪穴出土遺物

2. 出土陶磁器
(中世)

3. 出土陶磁器
(近世以降)

序

この報告書は、特別擁護老人ホームかたくりの里の建設に伴う、取り付け道路建設により緊急発掘調査された大庭遺跡の調査記録です。

大庭遺跡は、鎌倉時代末期、辰野町の天竜川の西方地域に勢力を持っていた豪族宮所孫次郎光信の居館「横河城」の推定地を含む遺跡です。宮所孫次郎は、上島の普門院に伝えられている国重要文化財の木造十一面観音立像を造立した施主としても名をとどめています。しかし、栄華を極めた宮所氏は鎌倉幕府滅亡後の中先代の乱の余波で滅びたとされています。

今回の調査では、居館跡等を確定するにはいたりませんでしたが、戦国時代の遺跡であることが判明しました。辰野町域で戦国時代の遺跡を調査した例は、樋口内城遺跡や堀の内居館跡などの居館跡で、他の性格の遺跡を調査した例はなく、貴重な成果だと思われ、戦国時代を考えるための一資料を提出できたと考えております。皆様にはこの報告書をご活用いただけたら幸いです。末筆ではございますが、発掘調査にご協力いただいた方々、整理作業にかかわった方々へ厚くお礼申し上げます。

辰野町教育委員会

教育長　一ノ瀬　健二

例　　言

1．本書は、特別擁護老人ホームへの取付道路建設に先立って実施された、長野県上伊那郡辰野町大字上島2126－1外に所在する大庭遺跡（おおにわいせき）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は辰野町教育委員会が辰野町役場建設課の委託を受けて行った。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。

3．発掘調査は、平成12年4月10日より同年6月5日まで現場での作業を実施し、平成12年6月6日より平成14年3月15日まで遺物整理及び報告書作成を行った。

4．発掘現場における記録は、大木丈夫が担当し、遺構などの実測図の作成は大森淑子、板倉裕子、福島永、大木が行った。また、現場での写真撮影は福島、大木が行った。遺物等の実測図及び遺構・遺物のトレース図の作成は赤羽弘江、佐藤直子、竹内みどり、大木が行った。遺物の写真撮影は大木が行った。

5．発掘調査にかかわる出土品、図面、記録等はすべて辰野町教育委員会で保管している。

発掘調査関係者名簿

発掘調査体制

教育長	一ノ瀬健二				
生涯学習課長	武井　誠				
生涯学習課長補佐兼文化係長	三浦　孝美				
文化係	福島　永				
	大木　丈夫（平成12年度は嘱託職員、調査担当者）				
発掘調査参加者	赤羽袈裟喜	板倉　裕子	臼井　紀子	大森　淑子	小沢　茂
	小沢　法子	高木　四郎	田中　正子	堀内　智司	丸山　勝好
	宮沢　英子	宮原　栄治	山崎　誠		
遺物整理参加者	赤羽　弘江	板倉　裕子	大森　淑子	工藤　信子	佐藤　直子
	竹内みどり	村上　茂子			

目　　次

巻頭図版
序
例　　言
目　　次
挿図目次
表　目　次
写真図版目次

第1章　発掘調査の経緯と経過 …… 1
1　保護協議の経過 …… 1
2　発掘調査の経過 …… 1

第2章　遺跡の環境 …… 4
1　地理的環境 …… 4
2　歴史的環境 …… 6
（1）周辺の遺跡 …… 6
（2）歴　　史 …… 6

第3章　発掘調査 …… 11
1　調査の方法 …… 11

第4章　遺構と遺物 …… 12
1　竪　　穴 …… 12
2　焼土址 …… 24
3　土　　壙 …… 24
4　溝　　址 …… 26
5　掘立柱建物址 …… 26
6　その他の遺物 …… 27

第5章　まとめ …… 31

写真図版

挿図目次

第１図　大庭遺跡位置図……３
第２図　サカサクボ遺跡トレンチ
・大庭遺跡調査区位置図……５
第３図　大庭遺跡周辺遺跡分布図……７
第４図　辰野町域城館跡分布図……９
第５図　第１号竪穴出土遺物……12
第６図　第１・２・16号竪穴遺構平面図……13
第７図　第３・４・17号竪穴遺構平面図……14
第８図　第２・16・３・17・４号竪穴出土遺物…15
第９図　第５・６・７号竪穴遺構平面図……16
第10図　第５・７号竪穴出土遺物……17
第11図　第８・９・10号竪穴遺構平面図……18
第12図　第11・12号竪穴遺構平面図……19
第13図　第13・14号竪穴遺構平面図……20
第14図　第15・18号竪穴遺構平面図……21
第15図　第19～22号竪穴・
第１号焼土址遺構平面図……23
第16図　第１～９号土壙遺構平面図……25
第17図　第１号溝址遺構平面図……26
第18図　柱穴実測図……27
第19図　遺構外出土遺物……28
第20図　全体測量図……43・44

表目次

第１表　大庭遺跡出土土器・陶磁器一覧表……29
第２表　大庭遺跡出土金属製品一覧表……30
第３表　大庭遺跡出土銭貨一覧表……30

写真図版目次

巻頭図版　１．第７号竪穴出土遺物　２．出土陶磁器（中世）
３．出土陶磁器（近世以降）
図版１　１．発掘調査前風景　２．発掘調査風景
図版２　１．遺跡全景（北西より）　２．遺跡全景（南東より）
図版３　１．第１号竪穴　２．第２・16号竪穴　３．第３号竪穴
図版４　１．第17号竪穴　２．第６号竪穴　３．第８号竪穴
図版５　１．第７号竪穴　２．第７号竪穴出土遺物　３．第９号竪穴
図版６　１．第10号竪穴　２．第11号竪穴　３．第13号竪穴
図版７　１．第15号竪穴　２．第１号焼土址　３．第１号溝址
図版８　１．遺跡出土金属製品　２．第７号竪穴出土銅製品　３．遺跡出土銭

第１章　発掘調査の経緯と経過

１　保護協議の経過

平成11年５月17日付けの「平成12年度開発事業に係わる埋蔵文化財について」の文書で、周知の遺跡内における開発行為を照会したところ、平成12年度の予定でサカサクボ遺跡・大庭遺跡を含む約4,000㎡において、特別擁護老人ホーム「かたくりの里」と、そこへ通づる国道153号線からの取付道路を建設するとの回答が寄せられた。まず、特別擁護老人ホーム建設事業について、平成11年10月18日に長野県教育委員会、上伊那社会福祉協会、辰野町教育委員会の三者により保護協議が実施された。

特別擁護老人ホームの建設予定地は、周知の遺跡のサカサクボ遺跡と大庭遺跡を含む範囲であり、また、大庭遺跡一帯は鎌倉時代末期から南北朝期の有力豪族宮所孫次郎光信の居館といわれ、市河文書にみえる「横河城」の推定地でもあるため、教育委員会側では、調査経歴がないこともあり試掘調査を実施し詳細をつかみたいとした。そして、実施設計を行うまでに遺跡の内容や遺跡の範囲の確認のための試掘調査を行い、調査結果を実施計画に反映させることとし、必要とあらば、再度保護協議をすることになった。

サカサクボ遺跡の試掘を平成12年１月11日から２月10日にかけて行ったところ、目立った遺構・遺物の発見はなかったが、現地形で堀状になっている「堀尻」と呼ばれる地点のそばから、薬研堀の形態で掘り込みが確認された。そこからは遺物の出土はみられなかったが、薬研堀の形態で検出されたため、中世でも古い段階のものと考えられた。そのため取付道路の計画が決定次第調査することになった。

そこで、取付道路建設について町建設課、上伊那社会福祉協会、町教育委員会で平成12年２月23日に再度保護協議を行った。道路の建設予定地は、大庭遺跡の範囲内にあり、さらに、「堀尻」と呼ばれている地点も予定地に入っている。取付道路予定地は買収交渉中であり、用地買収後に発掘調査を実施することになった。「堀尻」付近のトレンチから堀状の遺構らしきものが検出されており、他にも遺構の存在が推定されるので、試掘調査をせず、道路予定地の表土を剝いでいく中で、遺構のある場所を調査することになった。また、特別擁護老人ホームを平成13年４月にオープンさせるために、最優先に実施するようにとの業務命令があったので、年度明けの４月から調査に着手することになった。

平成12年２月23日に町建設課から大庭遺跡の発掘通知が提出され、町教育委員会が意見書を添付して、県教育委員会へ送付した。意見書には前述の保護協議の経過を記述してある。

特別擁護老人ホーム建設のために機材、材料などの運び込みの仮設の道路が必要で、建設用地内に電信柱などがあり、調査区を機材搬入路として使用したいとの要望から、調査区の北側から調査に着手することとした。

２　発掘調査の経過（調査日誌より）

平　成　12　年

４月10日（月）曇

バックホーによる表土の除去作業。ジョレンによる遺構検出作業開始。

４月11日（火）晴れ

表土除去作業一旦終了。ジョレンによる遺構検出作業。

4月20日（木）雨

雨天の為現場休み。

4月21日（金）晴れ

バックホーによる表土除去作業再開。

4月24日（月）晴れ

日曜日の雨の為、表土の除去作業は中止。現場作業は普段通り行う。

4月25日（火）晴れ

表土除去作業。ジョレンによる遺構検出作業。

4月26日（水）曇り後雨

表土除去作業終了。雨により午前10時で現場作業終了。

4月27日（木）晴れ

グリッド杭設定開始。ジョレンによる遺構検出作業。

4月28日（金）晴れ

グリッド杭設定終了。遺構の半截作業。

5月16日（火）晴れ

第1・6号竪穴平板測量。10・11号竪穴セクション図作成。

5月22日（月）晴れ

バックホーによる堀尻地区表土除去作業。

5月24日（水）晴れ

全体写真撮影の為、遺構内などの掃除。第13・14号竪穴セクション図作成。

5月25日（木）晴れ

測量続き。全体写真撮影準備。全体写真撮影。

5月26日（金）晴れ

全体測量図作成。

5月29日（月）晴れ

第14・15号竪穴平板測量。焼土址セクション測量。全体測量図作成。

5月31日（水）雨

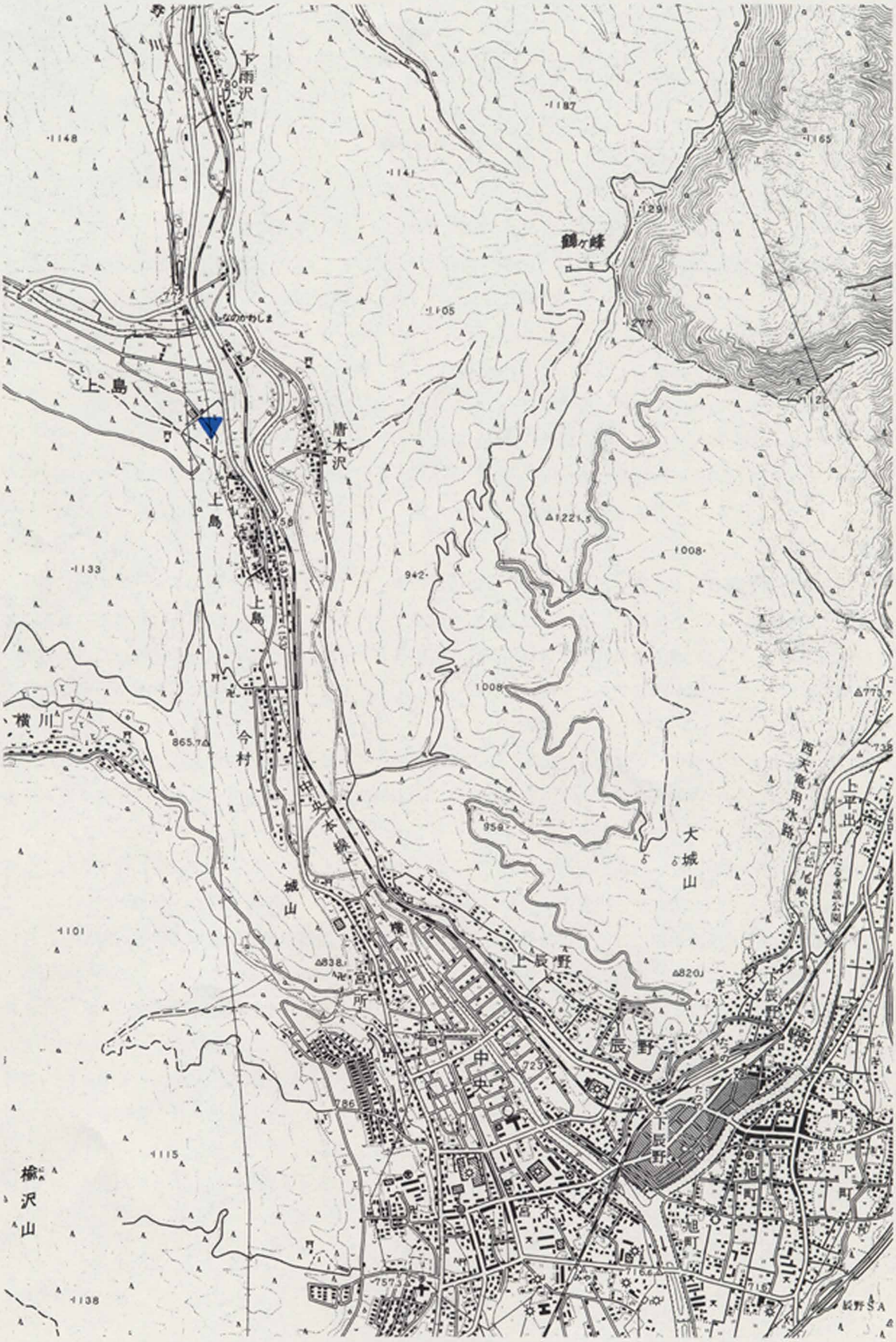
堀尻地区表土除去作業。現場作業雨天の為中止。

6月2日（金）晴れ

堀尻地区全体写真撮影。一部機材の撤収。

6月5日（月）晴れ

堀尻地区全体測量。現場の作業終了。残りの機材の撤収。



第１図　大庭遺跡位置図

第2章　遺跡の環境

1　地理的環境

辰野町は、西を木曽山系にあたる経ヶ岳山脈（標高2,296m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の一つである沢底川を境として南部は標高1,100m～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町で最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

町は伊那谷の最北部ということもあり、山地が全面積の約7割を占め、平坦部は3割程度しかない。したがって、東山の麓から西山の麓までの幅が狭く、また、多くの段丘によって地形的な制約をうけている。しかし、町南部の羽北地区では平地部が大きく開け、箕輪町へと続いている。

また、辰野町北部の市町境界を含めた権兵衛峠―経ヶ岳―牛首峠―霧訪山（きりとうやま）―善知鳥峠（うとうげ）の連なりは南北分水界となっており、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込んでいる。

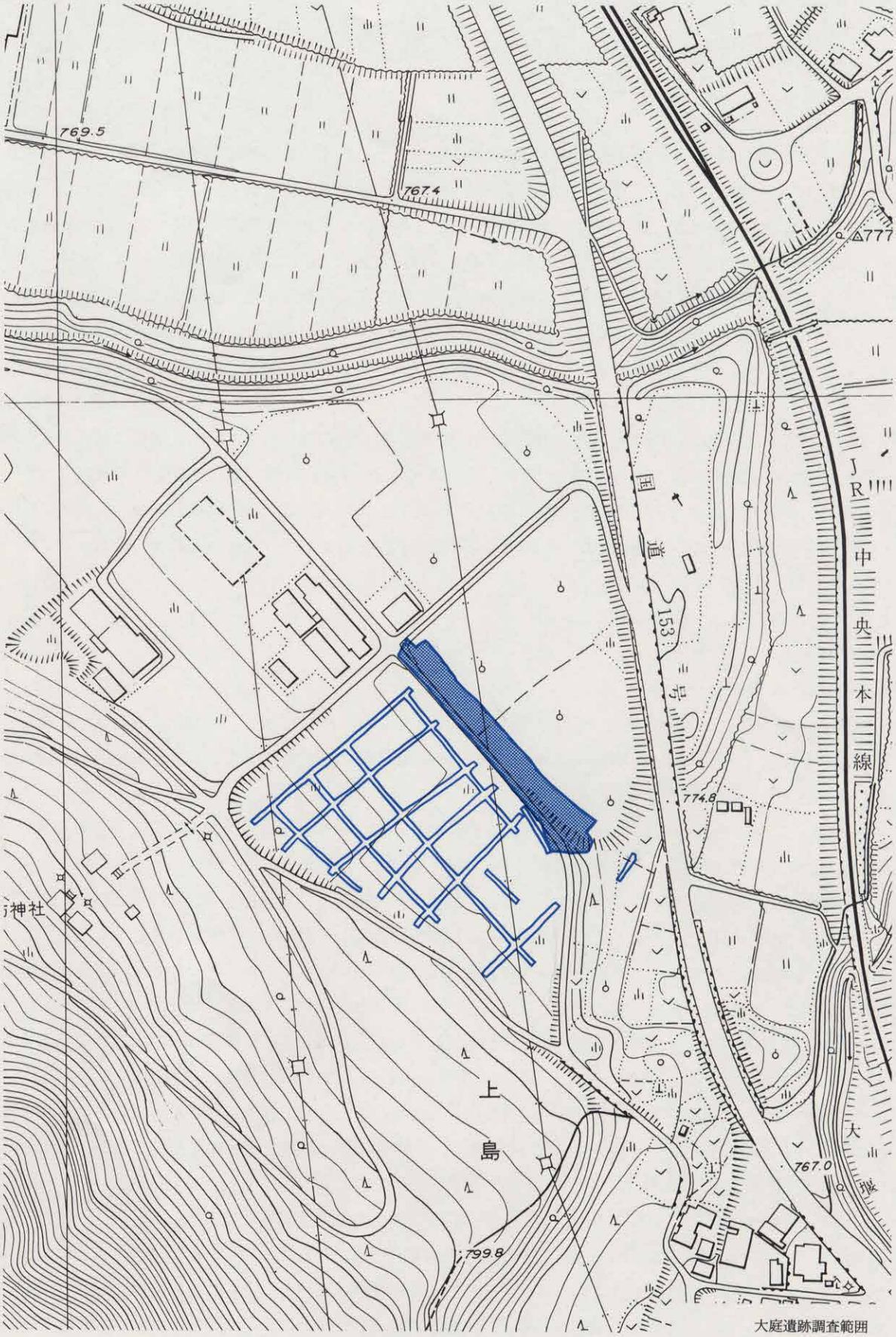
一方、諏訪湖を源とする天竜川は、両岸に数段の段丘に挟まれて町を南北に縦断するように南流している。以前、この段丘は天竜川の侵食によって形成された河岸段丘と考えられていたが、現在は断層崖であることがわかっており、この断層崖の最低部に天竜川が流れていると考えられるようになっている。この断層崖の山麓部には扇状地の発達が顕著であり、特に楡沢山～桑沢山山麓では、扇状地が重なりあった、複合扇状地が形成されている。

また、町のほぼ中心部に位置する荒神山は、この山の西部を流れる天竜川等の侵食によって形成された残丘であり、この丘には古期テフラがのっている。さらに赤羽地区の集落が集中する真金寺付近には扇状地が形成されているが、テフラをのせていることから古い扇状地であると考えられれる。

さらに、天竜川西部の経ヶ岳を源流とする横川川や、小横川川の上流部では、横川渓谷に代表されるようなV字谷が深く入り込んでおり、下流では川幅がひろがって小規模な谷底平野・段丘・崖錐が発達している。

伊那盆地の西部や東部山麓には大きな断層線が走っており、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層」と呼ばれ、後山地籍は断層によって尾根が孤立し、稗塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、西方の明神山は古い扇状地が活断層によって持ち上がったものである。さらに新町の上水道水源地の堀割では、昭和4年に春日琢美によってテフラを切る断層が観察され、スケッチに残されているが、このスケッチをみるとテフラの降灰が停止してから15,000年の間に西方の山地が約2.3m上昇したことがわかる。また、新町の天竜川河畔の赤渋より、天狗坂を通って宮所、上島を結ぶ線は赤渋断層と呼ばれ、宮木の大新田より原田地籍へ上がる坂で、断層によって原田の地盤がはねあがった様子が観察されている。

大庭遺跡は、町の北西、上島の集落の北側に所在し、穴倉山の北東のすそ野、横川川右岸の段丘上に存在している。



第2図　サカサクボ遺跡トレンチ・大庭遺跡調査区位置図

2　歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

大庭遺跡周辺にはおおよそ縄文時代と平安時代と中世の3つの時代の遺跡が確認されている。横川川の右岸の段丘上には、原遺跡（31）があり、勝坂式土器と打製石斧が採集されている。下っ原遺跡（32）では縄文土器、大庭遺跡（33）では縄文時代中期の土器と打製石斧を、サカサクボ遺跡（34）では石鏃がそれぞれ採取されている。横川川左岸の段丘では忠兵衛平遺跡（35）があり、縄文土器が拾われている。

今村地区には芹田遺跡（238）があり、平安時代の遺跡である。この遺跡の西隣りには今村北畑遺跡（235）があり、縄文時代、平安時代、中世の3つの時代の遺跡である。上島地区には、上島北遺跡（239）があり、平安時代と中世の遺跡である。今村北畑遺跡の南方には、木ノ下遺跡（37）があり、縄文時代の土器と打製石斧が採取されている。

大庭遺跡の東方、JR中央本線の線路を挟んだ段丘には町谷遺跡（214）があり、昭和60年に試掘調査され、14世紀室町時代前期の天目茶碗、常滑焼の破片が出土している。町谷下遺跡（240）も中世の遺跡であり、大庭遺跡、町谷遺跡と共に宮所氏に関連のある遺跡であろう。また、上島に普門院観音堂があり、そこに宮所孫次郎光信が施主となって造られた、国の重要文化財に指定されている木造十一面観音立像が安置されている（第3図）。

(2) 歴　　史

宮所郷について

中世の宮所の名は、『延喜式』に「宮処牧」として登場するのが初見である。中世の宮所郷は、現在の宮所区よりも広く、南の神戸、新町から宮木、小横川、今村、上島、北の横川まで広がる天竜川西岸地域一帯を示す地名であったと推定されている。

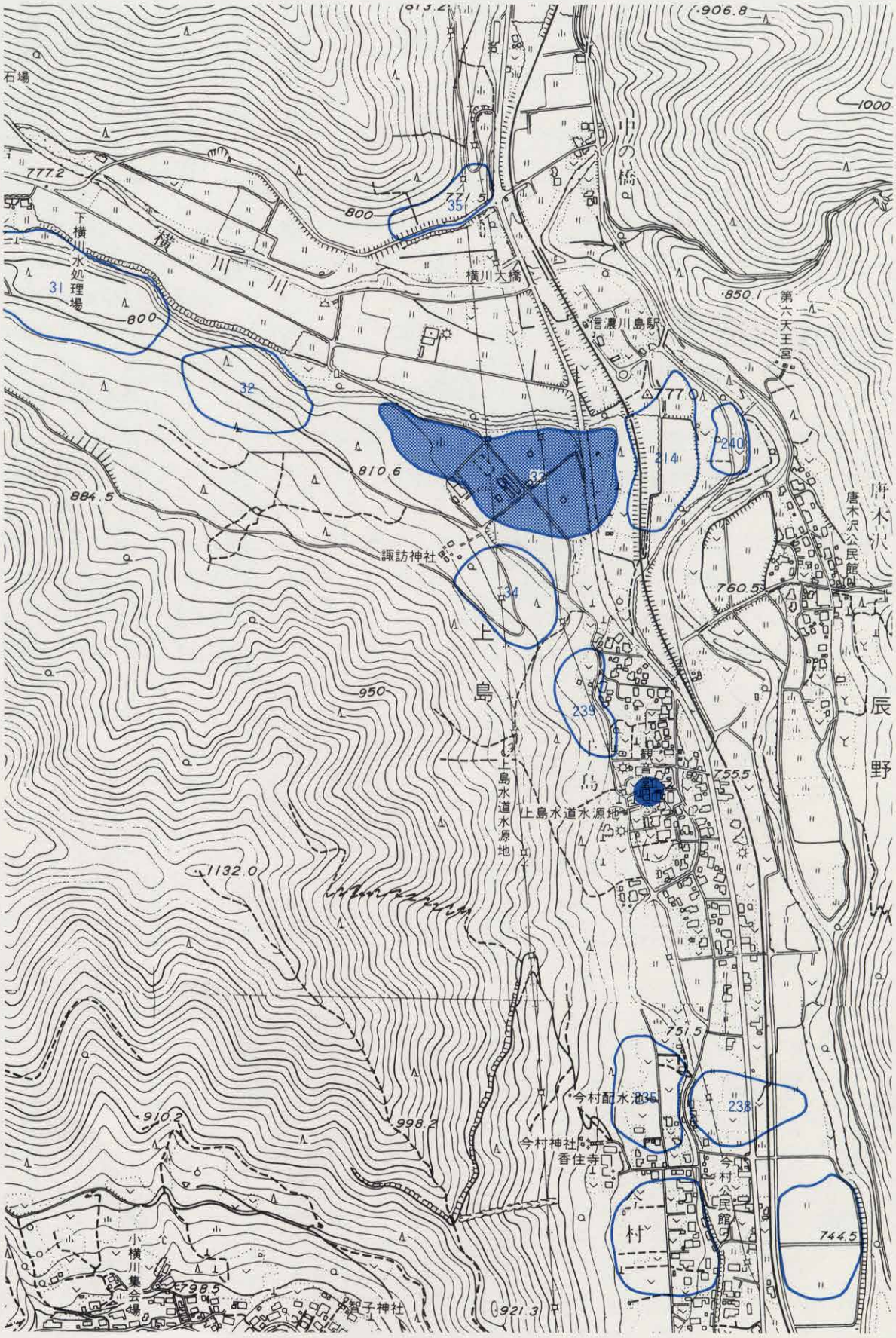
『吾妻鑑』によると、治承4年（1180）、信濃平定の命をうけた甲斐源氏の武田信義とその子一条忠頼が菅冠者と称する平氏方がたてこもる大田切郷の城を平定した際、「宮所郷」は「平出郷」とともに諏訪上宮分として寄進されている。ちなみに、この時下宮分としても「竜市郷」「岡仁谷郷」の2郷が寄進されている。これ以後、諏訪上下社に関係する史料に宮所の名はたびたび登場し、戦国末期まで続いた。

さらに『吾妻鑑』によると、文治2年（1186）後白河法皇が源頼朝へ出した「関東知行国内の年貢未納の庄々への注文」の記事があり、その中に「宮所」と「平出」が出てくる。朝廷への年貢の未納に対し、「宮所」などの信濃国の御牧や荘園に源頼朝が年貢を催促している。記載から、信濃国は頼朝の知行国だということがわかり、このころ、「宮所」はまだ御牧として後白河法皇に認知されていたのである。

室町時代には、宮所郷は平出郷とともに、諏訪上社の神事中、五月会と秋庵と称される狩を主体とした神事に勢子として踏馬を勤仕していた。「守矢満実書留」・「神使御頭之日記」などの記録によると、寛正6年（1465）から天文23年（1554）までの間に少なくとも4回勤めている。

次いで宮所郷が史料上に表れるのは、天正6年（1578）の「上諏方造営帳」である。

それによると、宮所と平出の両郷が諏訪上社前宮の御宝殿の造営役を課されている。上社大宮の大廊20間のうち、北の妻6間を平出郷が負担し、南6間分を宮所郷が負担している。さらに、宮所郷のうち、根橋・神戸・宇津羅井・垣之内で上社の瑞籬1間800文を負担した記述がみられるが、根橋・垣之内は現在の上島地籍内にあたる。



第3図　大庭遺跡周辺遺跡分布図（●普門院観音堂）

他に、一ノ瀬芳正氏所蔵「御判物古書写」の、天文20年（1551）、高遠頼継が一瀬市村へ宮所郷のうち一瀬を宛行った文書。一ノ瀬の熊野神社の天正４年（1576）棟札にみえる宮所郷の記載などがあり、戦国時代になっても依然として広い地域を指していたことがわかる。

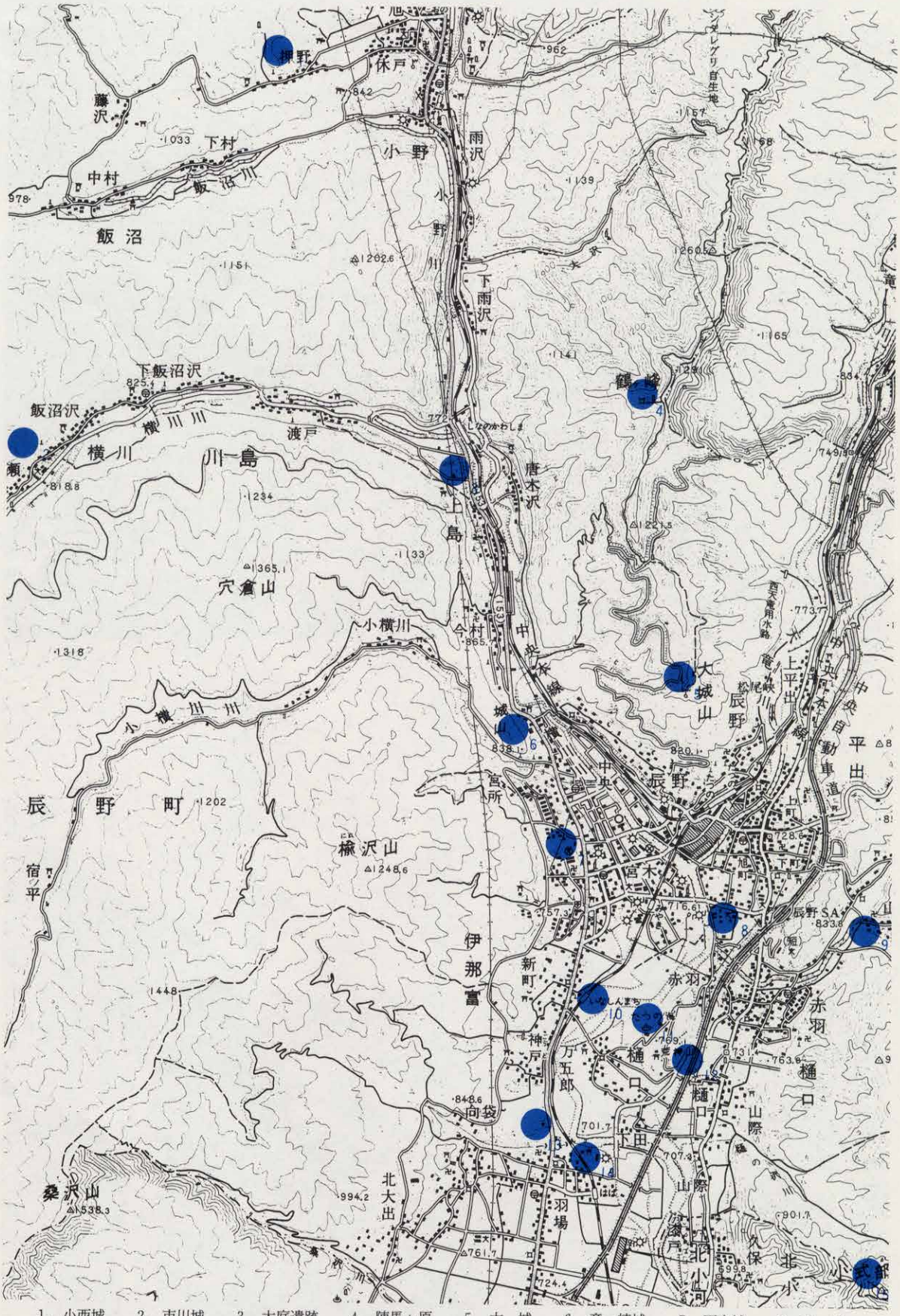
「横河城」の戦いと宮所孫次郎

大庭遺跡は、横川川がつくった河岸段丘上に位置しており、北は小野方面を南は伊那の平をのぞむことができる。古代には南北に東山道が通っており、遺跡周辺は交通の要衝となっていた。

鎌倉時代末期にはこの地域周辺を勢力範囲としていた宮所孫次郎光信が「横河城」のあった場所に居住したとされ、大庭地籍の近辺にその場所が推定されている。明治10年（1877）頃の『長野県町村誌』によると、光信の居館の中に十一面観音を安置した観音堂があり、そこにまつられていた観音像が現在上島の普門院に安置される木造十一面観音立像（国重文）としている。

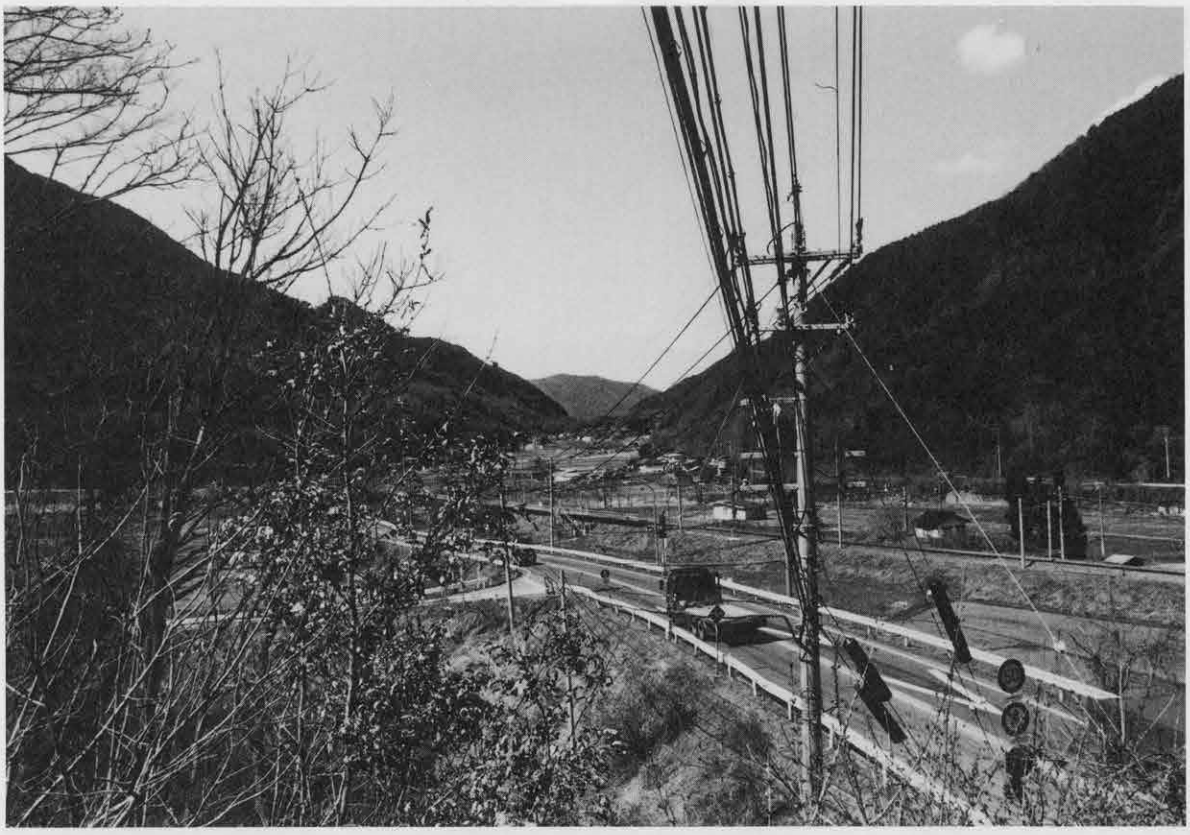
木造十一面観音立像の像内背部に墨書があり、そこには、元亨３年（1323）の年号と、仏師善光寺妙海、施主神光信、高野山大阿闍梨良禅などの名が記されている。施主の神光信こそが宮所孫次郎光信で、「神」は「ミワ」と読み、諏訪氏の血統であることを示す。光信の墓と伝えられている２基の五輪塔も本遺跡の西方にある。

鎌倉幕府滅亡後の建武２年（1335）、信濃国で旧幕府方の北條時行が叛乱を起こしたが、足利尊氏によって乱は終結する。いわゆる中先代の乱であるが、乱が終結しても、信濃国内は緊張状態が終わらなかった。「市河文書」の中に建武２年10月、市河倫房・助保父子に対する吉良時衡が花押を据えた着到状が存在する。そこには小笠原四郎・小笠原次郎太郎を大将として伊那郡の時行与党退治に出陣した折、市河助保が「横河城」で先駆けをし、凶徒等を追い落としたことが記されている。この文書に出てくる「横河城」が大庭遺跡に推定されており、周辺には町屋・堀端・堀上・垣内・桜垣外・堀尻などの地名も残る。



1．小西城　2．市川城　3．大庭遺跡　4．陣馬ヶ原　5．大　城　6．竜ヶ崎城　7．天白城　8．古　城
9．堀の内遺跡　10．新町原田南遺跡　11．荒神山　12．樋口内城　13．古　城　14．羽場城　15．小式部城

第4図　辰野町域城館跡分布図



大庭遺跡より小野方面を望む

大庭遺跡より辰野町中央を望む

第3章　発　掘　調　査

1　調査の方法

発掘調査は特別擁護老人ホーム建設の機材搬入路確保のため、調査区の北側から道の箇所をバックホーによる表土除去作業に入った。ジョレンなどで遺構検出作業を実施した。遺構検出面に山から押し出してきたと思われる大変多くの礫が存在していた。

次に調査区東側の道に接しているリンゴ園をバックホーにより表土の除去作業を行った。国道153号線に向う「堀尻」と呼ばれる堀状の地形になっている地区以外の表土剝ぎを終え、遺構を掘り進めた。(第２図参照)

最後に前述した箇所の調査が終わりに近づいたとき、「堀尻」２ヶ所にトレンチを入れ、土層の観察、記録を行った。当初は、人力で掘削したが、この地区の地形が谷状になっており、深さが約５ｍもあり、土の置き場等を考えると、人力では無理があるとの判断から再度バックホーを入れて掘り下げた。その後、ジョレンを用い遺構確認したが遺構もなく、表土を剝ぎ取った後は、地山の礫が出土し、大変崩れやすく、堀として機能していたとは考えられなかった。

遺構確認後は、遺構内は移植ゴテ等により調査を行い、遺構全体を確認できた竪穴には、土層堆積を確認する畦を十字に残し、測量して記録した。また、遺構全体を確認できない竪穴や土壙など小規模な遺構に関しては、遺構を半截し土層を観察し記録した。

遺構を測量するための基準杭は、Ｔ－１（Ｘ＝836.966 、Ｙ＝－47415.271、Ｈ＝790.982）を基準点として、２ｍ×２ｍでグリッドを設定し、４ｍ間隔で杭を設置し、東西方向にアルファベット、南北方向に数字を用いあらわした。

遺物は、遺構検出作業時に出土した遺物に関してはグリッドごとに、遺構から出土したものは遺構ごとに取り上げた。遺構から出土した遺物は、必要に応じて出土位置を図化し、レベルを記録した。整理段階で遺物整理台帳を作成し、遺物ごとに出土遺跡の略称（ＯＮＷ)、遺物番号、出土地点を記入した。

現場での写真撮影は、２台の一眼レフカメラを使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用いた。出土遺物の撮影には６×７モノクロームネガフィルム、６×７カラーポジフィルムを使用した。

第4章　遺構と遺物

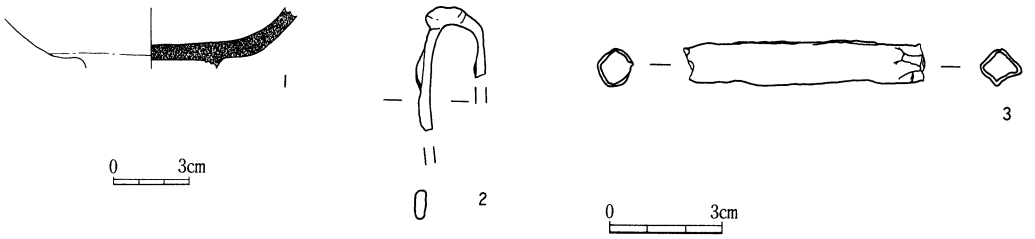
1　竪　　穴

第1号竪穴（第6図）

この遺構は、JC98 16—31 Bj—37グリッド付近で検出されている。第1号竪穴の北側に第6号竪穴が隣接している。主軸は南北に長く長軸約3.5m、短軸約2.2m、深さ約40cmの規模であった。プランは、隅丸で不整形を呈し、竪穴の北側がややふくらんだ形状をしている。覆土は、ロームの粒子を含む暗褐色系の土で覆われていた。底面には、柱穴などの掘り込みは確認できなかった。

出土遺物（第5図）

第1号竪穴からは、灰釉陶器が2点、鉄製品1点、キセルの吸い口が1点出土している。灰釉陶器甕の1点は破片のため図示できなかった。1は灰釉陶器の皿で、16世紀半ばの所産であろう。2は毛抜き状の鉄製品である。3は銅製のキセルの吸い口で、いずれも覆土中からの出土である。



第5図　第1号竪穴出土遺物

第2号竪穴（第6図）

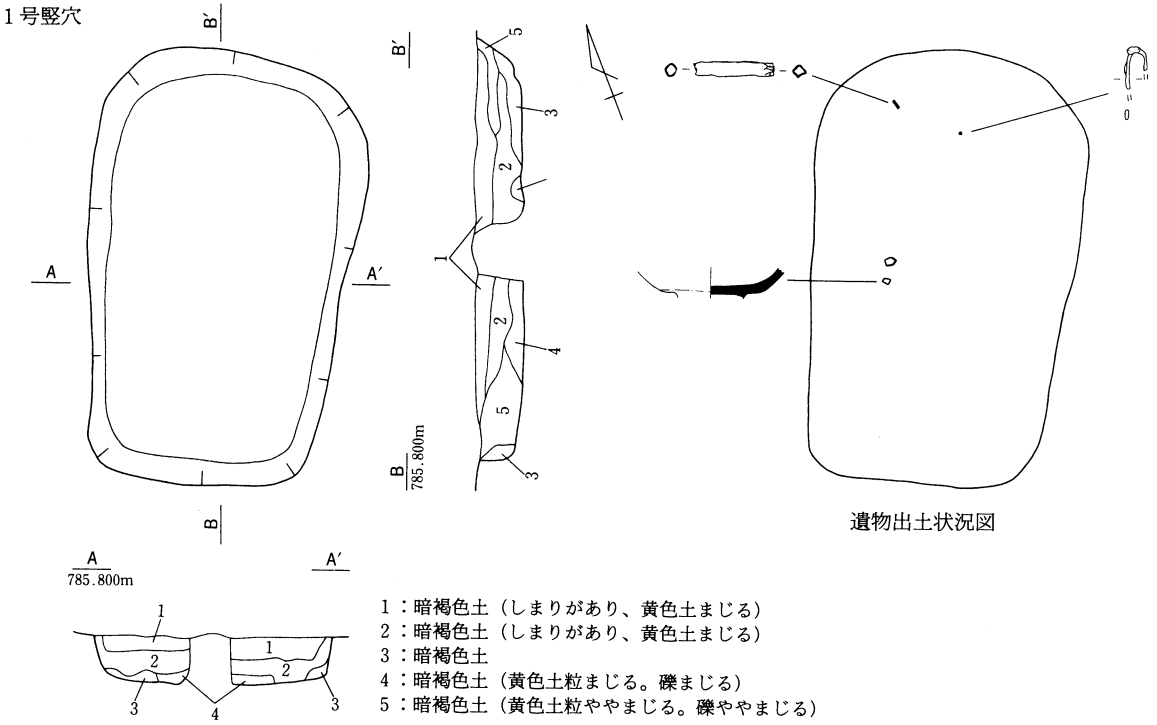
JC98 16—31 Bj—32付近で確認された竪穴である。遺構南西部は、調査区外になってしまい遺構全体の把握はできなかった。第16号竪穴と切り合って検出されている。新旧関係は土層断面の観察により、第2号竪穴の方が古いものと考えられる。一辺の長さは約3.3m、深さは約15cmといったごく浅いものである。覆土は、ロームの粒子を含む暗褐色系の土であった。底面には柱穴などの掘り込みは確認されなかった。

第16号竪穴（第6図）

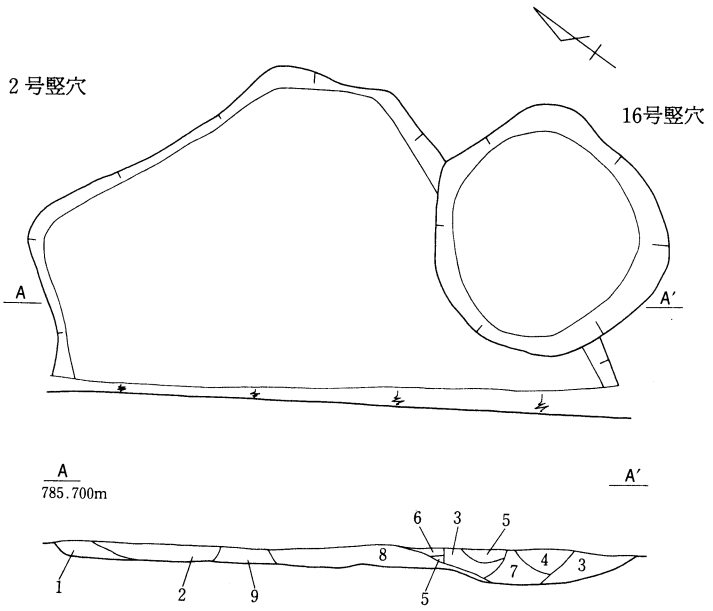
第2号竪穴と切り合って検出されている。第2号竪穴の項でも説明したように、第16号竪穴の方が新しいものと考えられる。直径1.8mの円形に近いプランであった。遺構の深さは、約30cmと第2号竪穴よりも深かった。ロームの粒子を含む暗褐色系の土が覆土であった。底面には柱穴などの掘り込みは確認されていない。

遺　　物（第8図）

1は棒状の鉄製品である。2は鉄釘である。これは第2号竪穴から出土している。3は毛抜状の鉄製品である。6・7・8は銅銭で、6と7は熙寧元寶（北宋銭）、8は元祐通寶（北宋銭）である。2以外は、両方の



1：暗褐色土（しまりがあり、黄色土まじる）
2：暗褐色土（しまりがあり、黄色土まじる）
3：暗褐色土
4：暗褐色土（黄色土粒まじる。礫まじる）
5：暗褐色土（黄色土粒ややまじる。礫ややまじる）



1：暗黄褐色土（黄色土粒まじる）
2：暗黄褐色土（黄色土粒まじる。やや褐色味をおびる）
3：暗褐色土（黄色土粒まじる。やわらかくもろい）
4：暗褐色土（黄色土粒まじる）
5：暗褐色土（黄色土粒まじる。しまりがある）
6：暗褐色土（しまりがある）
7：暗褐色土（黄色土粒ややまじる）
8：暗褐色土（黄色土粒ややまじる。しまりがある）
9：暗褐色土（黄色土粒多くまじる。やや黄色味をおびる）

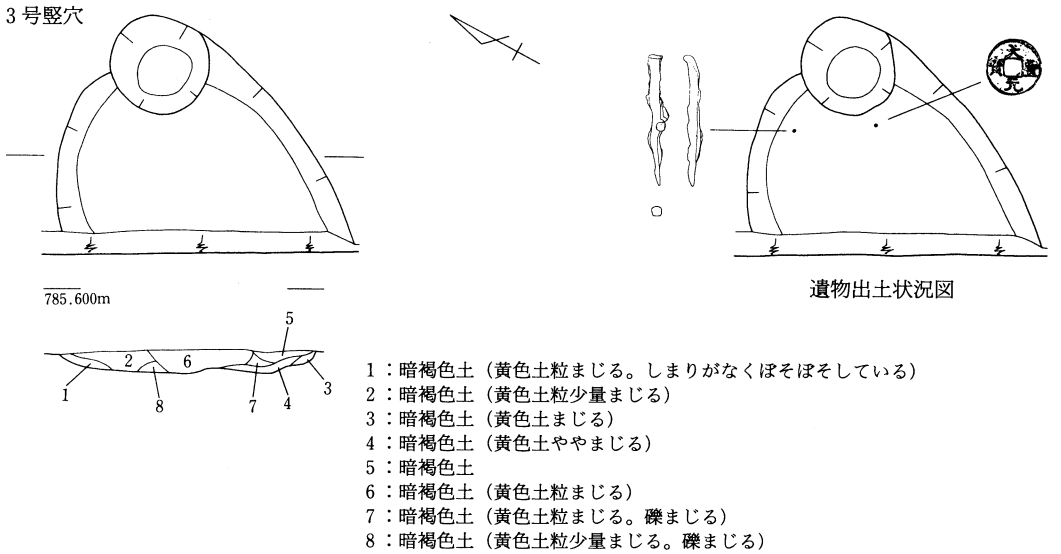
0　1m

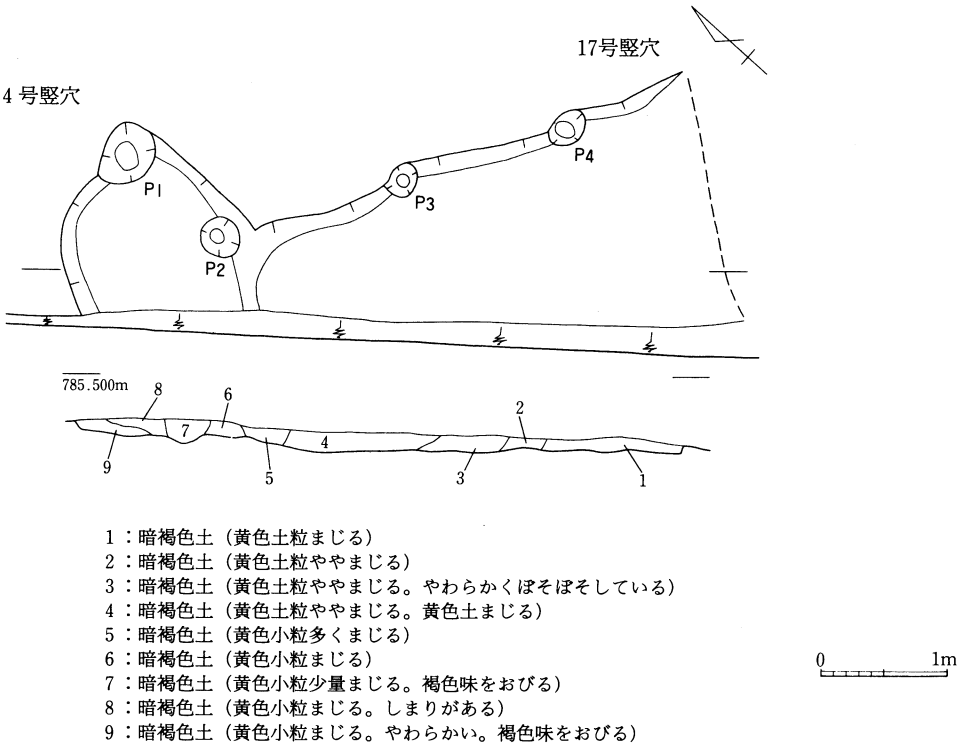
第6図　第1・2・16号竪穴遺構平面図

竪穴の遺物を一括して取り上げたため、どちらの遺構から出土したか明確にできなかった。

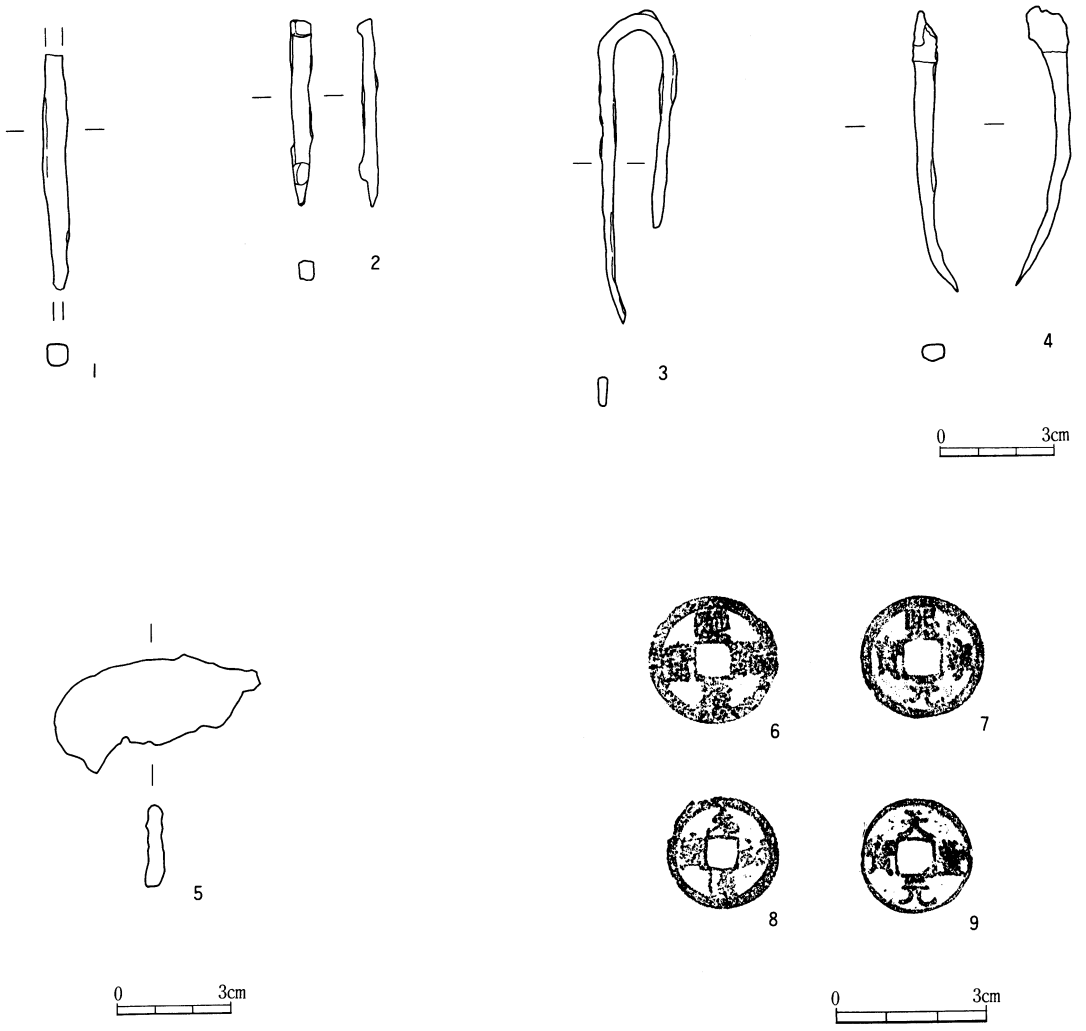
第3号竪穴（第7図）

第2・16号竪穴の南東部、JC98 16—31 Bg—34付近で検出された竪穴である。遺構の南西部は、調査区外になってしまい遺構全体を確認することはできなかった。遺構確認面からの深さは約15cmと浅いものである。東隅に土坑が掘り込まれている。土坑との新旧関係は、両遺構を一括して掘ってしまったため、確認できなかった。





第7図　第3・4・17号竪穴遺構平面図



第８図　第２・16・３・17・４号竪穴出土遺物（１～３・６～８：２・16号、４・９：３・17号、５：４号）

遺　　物（第８図）

４は鉄釘。９は銅銭で、天聖元寶（北宋銭）である。どの遺物も覆土内からの出土である。もう１枚銅銭が出土しているが、腐食してもろくなっており、拓影図を採れる状態ではなかった。他に鎌が出土しているが、目釘の穴があり、時代は新しいものと考えられるため、図は載せていない。

第４号竪穴（第７図）

JC98 16—31 Be—35グリッド付近で検出された遺構で、第17号竪穴とは切り合わず、接して検出されている。この竪穴も調査区の境で検出されたので、遺構全体の確認ができなかった。第３号竪穴を少々小さくしたプランを持つものと考えられる。遺構確認面からの深さは15cm である。底面において、ピット２基確認しているが、この遺構に伴うものではない。

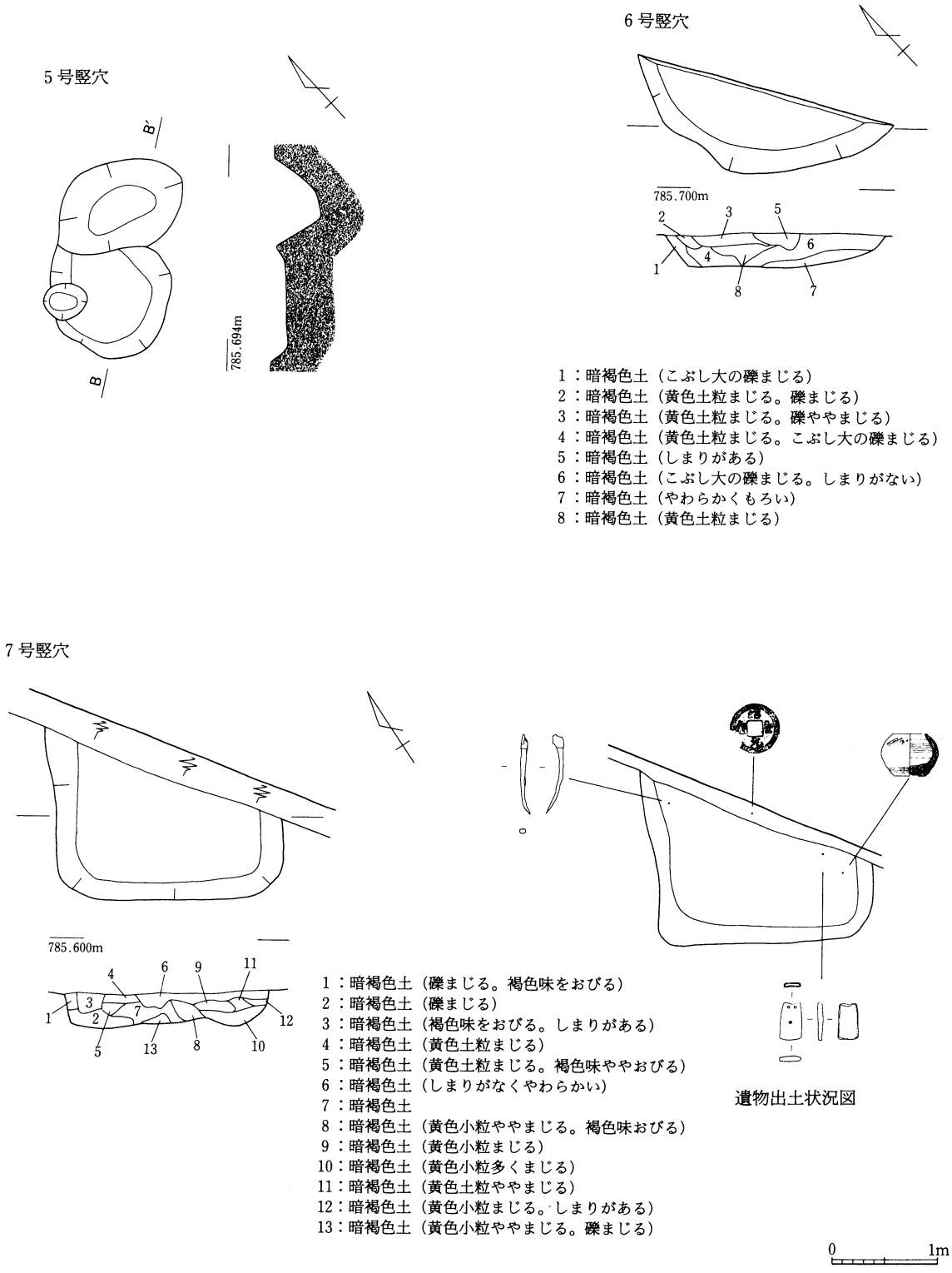
第17号竪穴（第７図）

第４号竪穴と接して発見されている。第４号竪穴と同様、遺構南西部が調査区外にあり、遺構全体の把握はできなかった。また、竪穴の西壁は重機で掘り込んでしまい、立ち上がりを確認できなかった。北壁には

ピットが２基確認されており、第４号竪穴内にあるＰ２と並んで確認されているが、遺構に伴うものではない。

遺　　物（第８図）

第８図５は用途不明の鉄製品である。覆土内から出土している。



第９図　第５・６・７号竪穴遺構平面図

第5号竪穴（第9図）

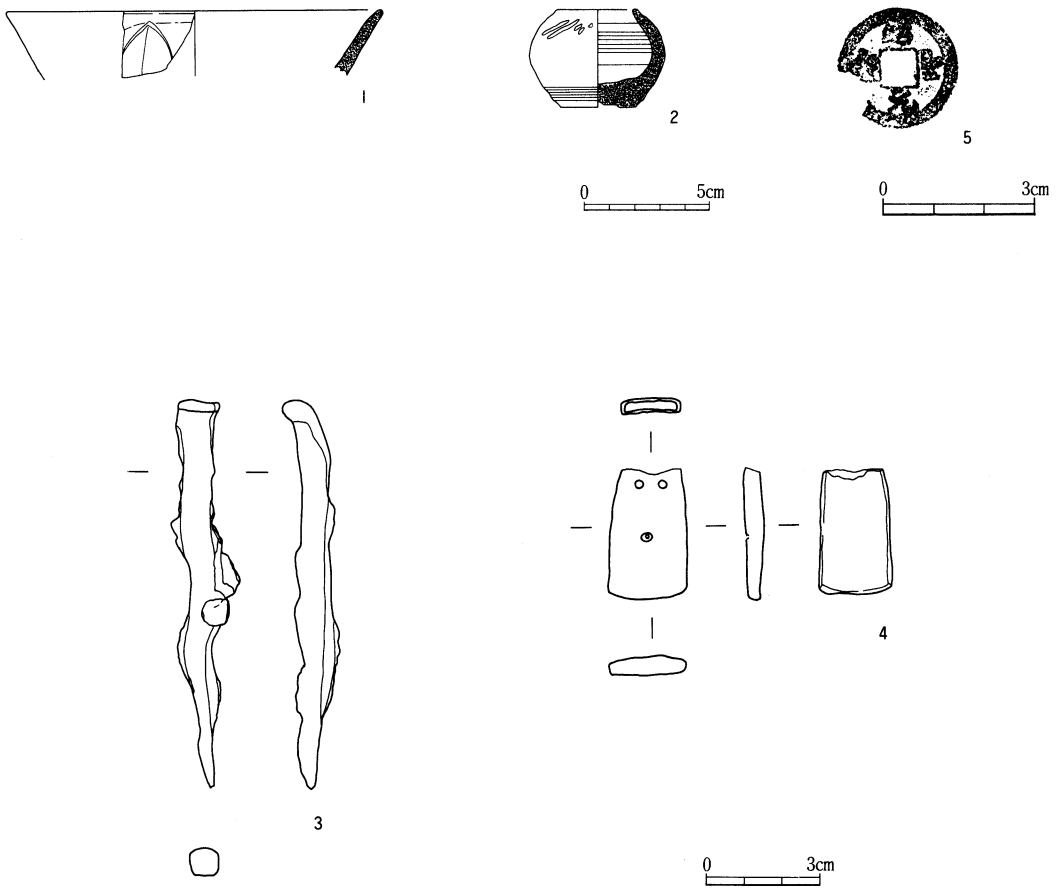
Jc98 16—31 Bm—34グリッド付近で確認された。プラン確認の際、第10号土坑との重複に気がつかなかったため、竪穴と考えて調査を行っている。覆土は、ロームの粒子を含む暗褐色系の土であった。平面形は不整形で、しかも円形に近いため、竪穴の可能性は少ないが、調査段階の遺構番号にならって竪穴に掲載している。なお、西壁にピットが検出されているが、この遺構に伴うものではないと考えられる。

遺　　物（第10図）

第5号竪穴から出土した遺物は1点である。1は青磁の碗の口縁部である。龍泉窯系の縞連弁を持つ。緑がかった釉薬が厚く掛けられている。覆土内からの出土である。

第6号竪穴（第9図）

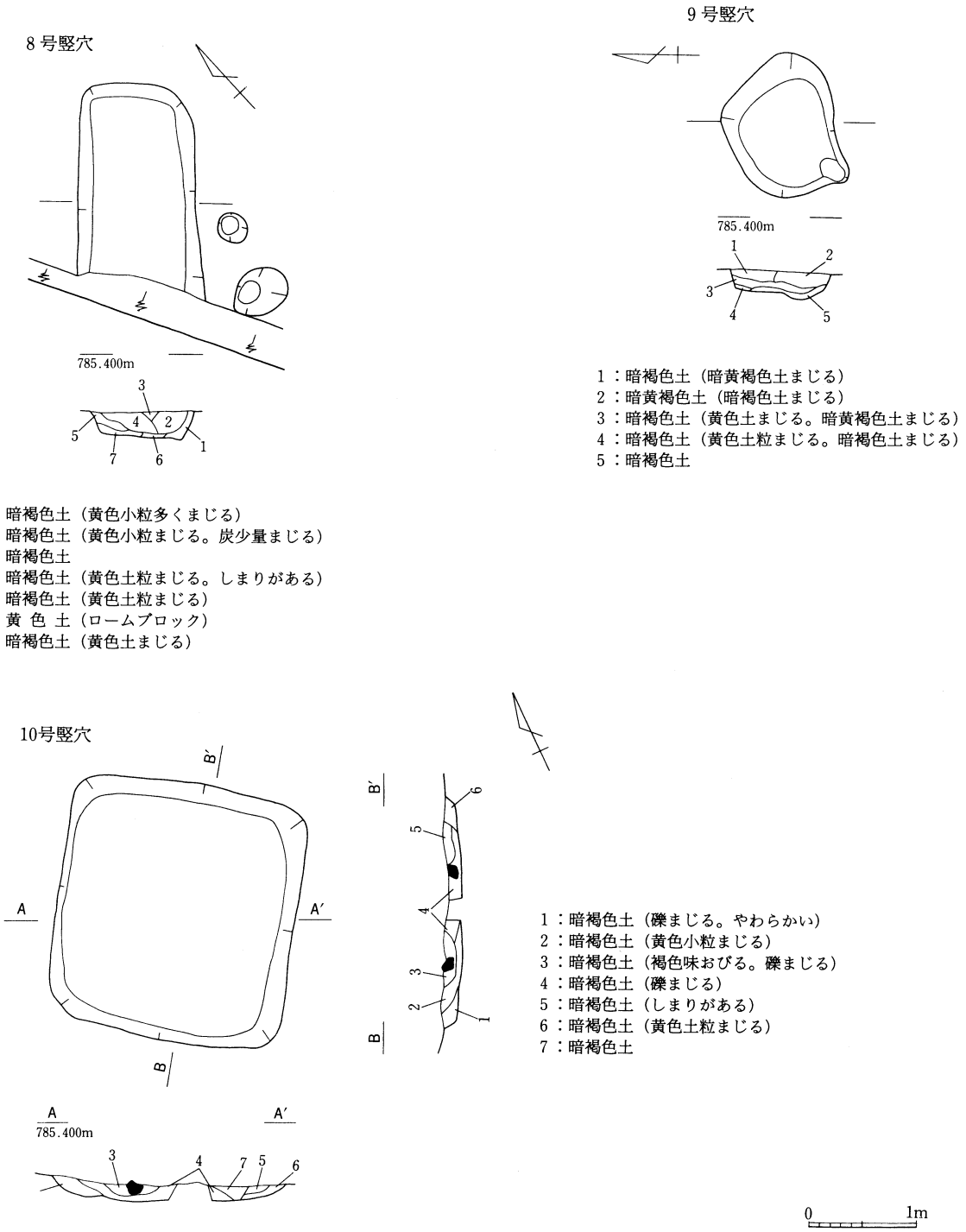
JC98 16—31 Bl—37グリッド付近で検出されている。この遺構の南側には第1号竪穴が存在する。遺構の北側部分が調査区外となってしまったため、竪穴を完全に確認することができなかった。しかし、遺構の隅の部分が検出されているため、隅丸の方形もしくは円形の竪穴だと推定できる。深さは約35cmをはかる。覆土は、ロームの粒子を含む暗褐色系の土であった。底面に掘り込みは確認されなかった。遺物の出土はみられなかった。



第10図　第5・7号竪穴出土遺物

第７号竪穴（第９図）

この遺構は、JC98 16—31 Bh—40グリッド付近から検出されている。竪穴の北側は調査区外に存在しており、遺構全体を把握するまでにいたらなかった。一辺の長さは、2.2m程で、深さ約35cm程の方形か長方形の竪穴と推定される。底面にはピットなどの掘り込みを確認することはできなかった。下層にはこぶし大の礫が混入しており、覆土はロームの粒子を含む暗褐色系の土である。



8号竪穴

1：暗褐色土（黄色小粒多くまじる）
2：暗褐色土（黄色小粒まじる。炭少量まじる）
3：暗褐色土
4：暗褐色土（黄色土粒まじる。しまりがある）
5：暗褐色土（黄色土粒まじる）
6：黄 色 土（ロームブロック）
7：暗褐色土（黄色土まじる）

9号竪穴

1：暗褐色土（暗黄褐色土まじる）
2：暗黄褐色土（暗褐色土まじる）
3：暗褐色土（黄色土まじる。暗黄褐色土まじる）
4：暗褐色土（黄色土粒まじる。暗褐色土まじる）
5：暗褐色土

10号竪穴

1：暗褐色土（礫まじる。やわらかい）
2：暗褐色土（黄色小粒まじる）
3：暗褐色土（褐色味おびる。礫まじる）
4：暗褐色土（礫まじる）
5：暗褐色土（しまりがある）
6：暗褐色土（黄色土粒まじる）
7：暗褐色土

0　1m

第11図　第８・９・10号竪穴遺構平面図

出土遺物（第10図）

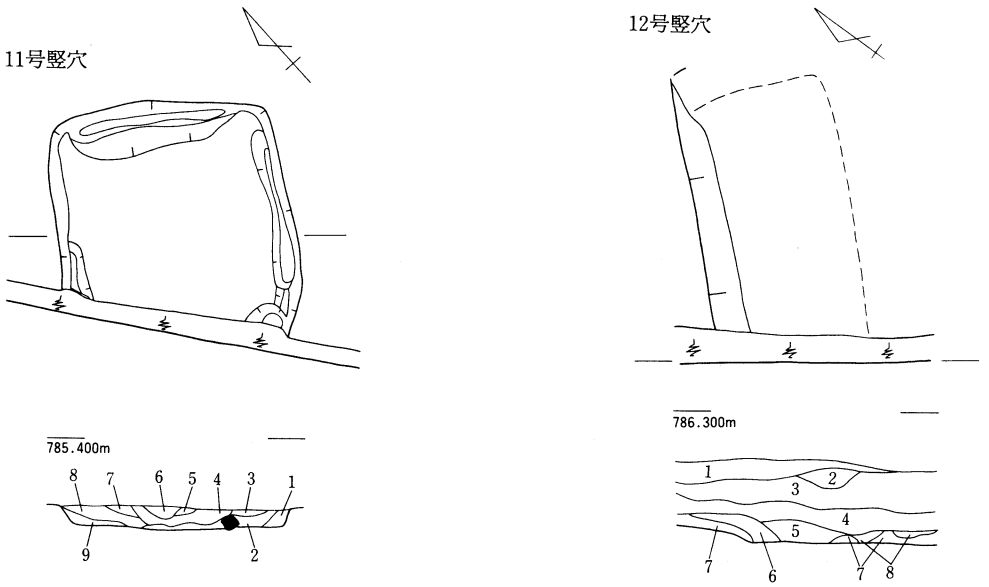
2は灰釉の小壺である。緑色味をおびた釉は、外面ほぼ全体に掛けられ、底部にまで達している。3は鉄釘である。4は鋳銅製品と考えられる。中空で、表面には3カ所、目釘穴かと考えられる穴が存在する。図上の上部2カ所は鋳造時にあけられていたと考えられるが、中央部については鋳造後に何らかの理由によって穿孔されたと思われる。5は紹聖元寳（北宋銭）である。これらの遺物は覆土中からの出土である。

第8号竪穴（第11図）

JC98 16—31 Ba—38グリッド付近で検出された遺構である。遺構の南西部が調査区外にあるため、遺構全体を確認することができなかった。一辺約1.1m、遺構確認面からの深さ約25cmといった細長い長方形をなすものと考えられる。床面に掘り込みは確認されていない。覆土の上層はロームの粒子が混入した暗褐色系の土で、下層はロームブロックが堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。

第9号竪穴（第11図）

JC98 16—31 Ba—40グリッド付近で確認されている。西側には第8号竪穴が存在している。プランは不整方形をなしている。長軸は1.2m、短軸は1.1m、深さは25cmである。竪穴南西部に円形の落ち込みが確認されている。この遺構に伴うものかは、検討を要する。覆土は、ロームの粒子を含む暗褐色系の土であった。遺物の出土はみられなかった。



1：黒色土
2：黒色土（暗褐色土まじる。しまりがない）
3：暗褐色土
4：暗褐色土（黄色土粒まじる。しまりがない）
5：暗褐色土（黄色小粒ややまじる。しまりがない）
6：暗褐色土（黄色小粒まじる）
7：暗褐色土（黄色土粒まじる。しまりがある）
8：暗褐色土（黄色土粒まじる）
9：暗褐色土（黄色土まじる）

1：表土
2：暗褐色土（埋土）
3：暗褐色土（しまりなくやわらかい）
4：暗褐色土（黄色土粒まじる）
5：暗褐色土
6：暗褐色土（黄色土粒まじる）
7：黄色土（地山）
8：暗褐色土（黄色小粒まじる）

0 1m

第12図　第11・12号竪穴遺構平面図

第10号竪穴（第11図）

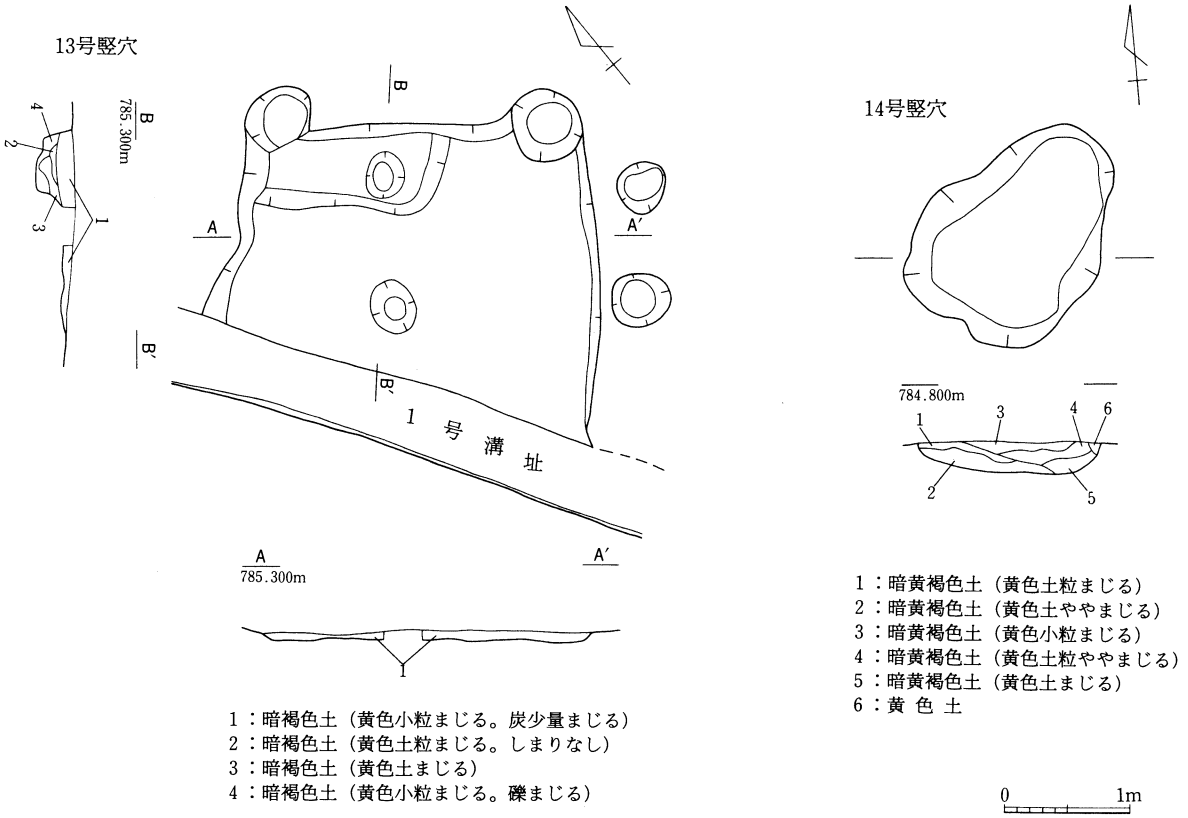
JC98 16—31 Bd—42グリッド付近にやや孤立して検出されている。プランは正方形に近い形で、南北に約2.3m、東西に約2.2m、深さ約20cmといった規模の竪穴であった。底面にはピットなどの掘り込みはなかった。覆土の上層には直径約10～15cmの礫が混入しており、下層は暗褐色系の土で覆われていた。

第11号竪穴（第12図）

JC98 16—31 Ax—40グリッド付近で検出されている。遺構西側には第8号竪穴が存在する。遺構南西部が調査区外に存在し、全体を確認するにいたらなかった。一辺約1.9mで、遺構確認面からの深さは約20cmである。底面には、検出されたそれぞれの壁際に、深さ約10cmの浅い掘り込みが存在する。また、遺構東側の調査区との境の底面に遺構確認面からの深さ約39cmの掘り込みも確認されている。この掘り込みは、竪穴に伴うものかどうか検討を要する。覆土は、下層においてロームブロックが存在しており、意図的に埋め戻された可能性がある。

第12号竪穴（第12図）

南東部に第2号竪穴が存在する。JC98 16—31 Bk—31グリッド付近で検出されている。この遺構も、遺構南西部が調査区外にあり、遺構全体の把握ができなかった。その上、表土剝ぎの段階で、北側の壁と東側の壁を掘り込んでしまい、壁の立ち上がりを確認することができなかった。図の点線は調査区境の土層断面の観察から推定されたものである。また、底面にはピットなどの掘り込みは確認できていない。遺物の出土はみられなかった。



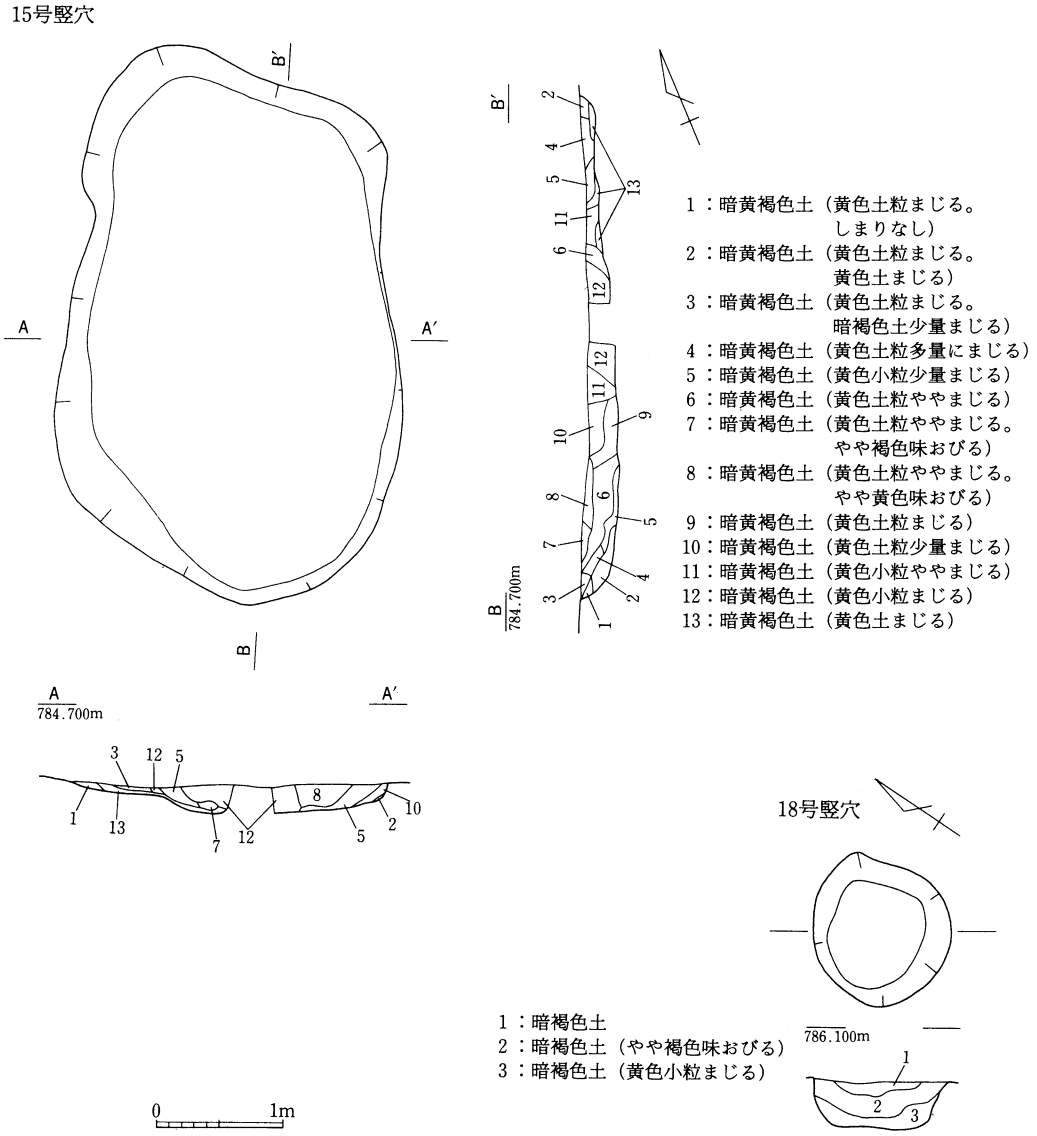
第13図　第13・14号竪穴遺構平面図

第13号竪穴（第13図）

JC98 16—31 At—44グリッド付近に存在している。遺構の南壁は、第１号溝址に切られているため、立ち上がりを確認することができなかった。東西の軸の長さは約3.0m、深さは約５cmとごく浅いものであった。北壁には、遺構北西部に遺構確認面から30cmほどの掘り込みが確認され、両端にピットが２基検出された。遺構の中央北側と南側に並んでピットが２基みつかっている。北壁際に検出されたピットは同一遺構と思われるが、竪穴に伴うものかは検討を要する。遺構中央の２基のピットも、この竪穴に伴うものではない。覆土は、ロームの粒子を含んだ暗褐色系の土であった。

第14号竪穴（第13図）

調査区東側の遺構の密度が低い地点から孤立して検出されている。JC98 16—32 Ao—４グリッド付近で確認された。遺構の北側部分が南側部分にくらべ狭くなっている。プラン確認の際、東西に長い楕円形の竪穴と考えたため、セクションベルトの位置が軸とずれたところに設定してしまった。不整形な長方形のプランであった。長軸が1.8m、短軸が1.4m、深さ25cmの規模の小さい竪穴であった。床面には柱穴などの掘り



第14図　第15・18号竪穴遺構平面図

込みは確認されていない。覆土は、この遺構と第15号竪穴に限っては、大きなロームの粒子を含んだ暗黄褐色系の土であった。また、遺物が3点覆土中から出土しているが、近代の陶磁器であるため、これらの遺物は図示していない。この遺構は近代の可能性が高い。

第15号竪穴（第14図）

第14号竪穴より西側において検出されており、やや孤立して存在している。遺構周辺にはピットなどの遺構はほとんどない地点である。JC98 16—32 Aj—7グリッド付近で発見されている。プランは隅丸の不整な長方形であり、長軸約3.8m、短軸約2.6m、深さ約20cmといった規模である。現場で図を取らなかったため、図示できなかったが、竪穴の西側中央部にテラスがある。底面にピットなどの掘り込みは確認されなかった。第14号竪穴と同様、覆土は大きなロームの粒子を含んだ暗黄褐色系の土であった。

第18号竪穴（第14図）

JC98 16—31 Br—28グリッド付近で検出されている。長軸約1.2m、短軸約1.1m、深さ約40cmといった小規模なもので、プランは不整な円形である。覆土は暗褐色土であり、下層にはロームの粒子を含んだ暗褐色土が堆積していた。底面にはピットなどの掘り込みは確認されなかった。

第19号竪穴（第15図）

この竪穴の南東側に第17号竪穴が存在する。JC98 16—31 Bf—38グリッド付近で検出されている。規模は長軸約2.2m、短軸約1.1m、深さ約25cmであり、プランは隅丸の長方形である。プラン確認の際、土坑が2基重複しているものと考えたため、軸線とは違う角度でセクションベルトを設定してしまった。覆土はロームの粒子を含んだ暗褐色系の土であった。底面にはピットなどの掘り込みは確認できなかった。

第20号竪穴（第15図）

この遺構の西側に第1号竪穴、北西には第6号竪穴が存在している。JC98 16—31 Bj—39グリッド付近で検出されている。規模は長軸約1.4m、短軸約0.7m、深さ約30cmで、プランは不整の長方形である。覆土はロームの粒子を含んだ暗褐色系の土で、下層においては、こぶし大くらいの礫が混入していた。底面にピットなどの掘り込みは確認できなかった。この竪穴からも遺物は出土していない。

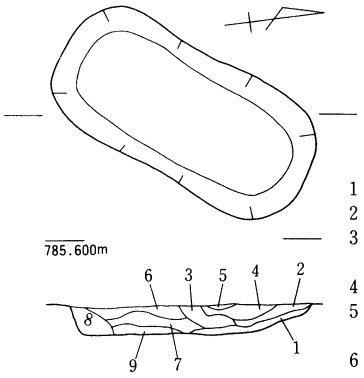
第21号竪穴（第15図）

この竪穴の北東側に第22号竪穴が隣接する。JC98 16—31 Bl—32グリッド付近で確認されている。長軸約1.2m、短軸約0.7m、深さ約35cmの規模で、プランは隅丸の長方形であった。覆土はロームの粒子を含んだ暗褐色系の土であり、下層にはロームブロックが混入していた。そのため、意図的に埋め戻された可能性がある。底面にピットなどの掘り込みは確認できなかった。遺物の出土はみられなかった。

第22号竪穴（第15図）

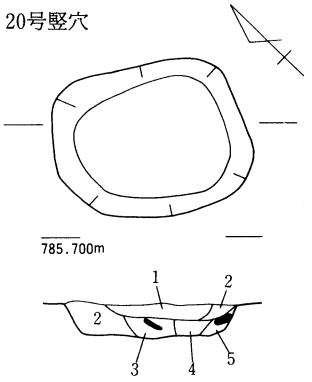
この遺構の南西側に第21号竪穴が隣接する。JC98 16—31 Bn—33グリッド付近で確認されている。長軸約1.2m、短軸約0.7m、深さ約30cmの規模で、プランは隅丸の長方形であった。第21号竪穴とプランは似ているが、第21号竪穴に比べ、壁が急に立ち上がっている。覆土はロームの粒子を含んだ暗褐色系の土であった。底面にピットなどの掘り込みは確認されなかった。遺物の出土はみられなかった。

19号竪穴



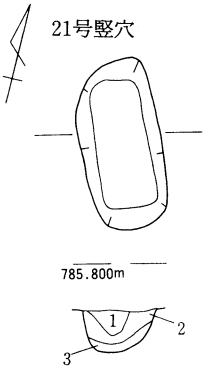
1：暗褐色土（黄色土まじる）
2：暗褐色土
3：暗褐色土（黄色小粒まじる。炭少量まじる）
4：暗褐色土（黄色小粒まじる）
5：暗褐色土（黄色小粒まじる。礫まじる。しまりあり）
6：暗褐色土（黄色小粒まじる。しまりあり）
7：暗褐色土（黄色小粒まじる。やや褐色味おびる）
8：暗褐色土（黄色小粒まじる。炭まじる。やや褐色味おびる）
9：暗褐色土（黄色小粒まじる。しまりなし）

20号竪穴



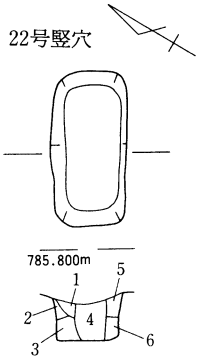
1：暗褐色土（黄色小粒まじる）
2：暗褐色土（黄色小粒ややまじる）
3：暗褐色土（黄色小粒まじる。礫まじる）
4：暗褐色土（黄色小粒まじる。褐色味おびる）
5：暗褐色土（礫多量にまじる）

21号竪穴



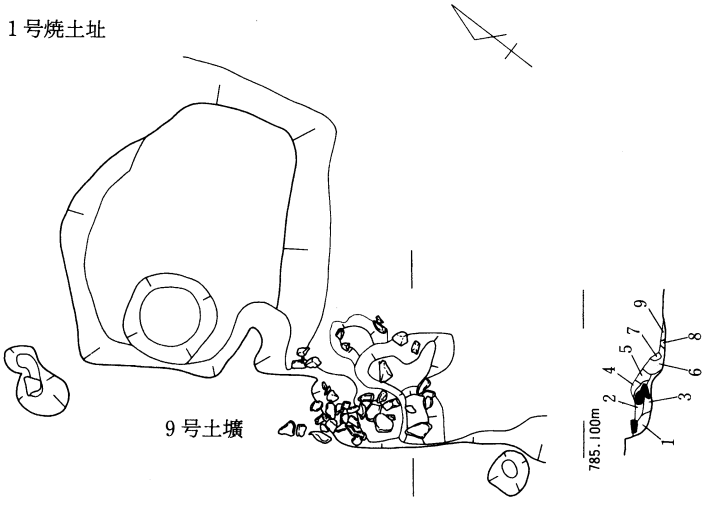
1：暗褐色土
2：暗褐色土（暗黄褐色土まじる）
3：暗褐色土（暗黄褐色土まじる。黄色土まじる）

22号竪穴



1：暗褐色土
2：明褐色土
3：暗褐色土（褐色味おびる）
4：暗褐色土（黄色土粒まじる。しまりなし）
5：暗褐色土（黄色小粒ややまじる。しまりあり）
6：暗褐色土（黄色小粒まじる）

1号焼土址



1：暗褐色土（黄色土まじる）
2：暗褐色土（炭少量まじる。褐色味ややおびる。しまりなし）
3：暗褐色土
4：暗褐色土（焼土まじる。しまりあり）
5：暗褐色土（黄色小粒まじる。しまりなし）
6：暗褐色土（黄色土粒まじる。炭まじる。焼土まじる）
7：暗褐色土（しまりあり）
8：暗褐色土（黄色土粒ややまじる。炭まじる。焼土まじる）
9：暗褐色土（黄色土粒少量まじる。炭まじる。焼土まじる）

0　1m

第15図　第19～22号竪穴・第1号焼土址遺構平面図

2　焼　土　址

第１号焼土址（第15図）

JC98 16—31 Ay—44グリッドから検出されている。このグリッド周辺一帯の土が黒かったので、数本トレンチを入れて遺構があるか確認した．そのうちの１本から焼土が大量に出土したため、周辺を慎重に調査してみると、礫が出土し、土の高まりも検出された。礫が出土している地点の北側では、第15図に示したようにテラスが確認される。堀り込みの中に、第９号土壙が検出されている。遺物の出土はみられなかった。従って、時代は不明である。土の高まりは、暗褐色系の焼土とロームの粒子を含んだ土と礫で構成されている。

3　土　　壙

第１号土壙（第16図）

この土壙の北側に第１号竪穴が存在する。JC98 16—31 Bi—37グリッド付近で検出されている。直径約0.9mの円形のプランを呈する。断面は皿のような形であった。ロームの粒子を含んだ暗褐色系の土が覆土であった。

第２・3号土壙（第16図）

この遺構の西側に第２・16号竪穴が隣接している。JC98 16—31 Bi—34グリッド付近で検出されている。第２号土壙と第３号土壙は切り合って検出されている。土層断面の観察より、第３号土壙よりも第２号土壙の方が新しいと考えられる。第２号土壙は、直径約0.8mのほぼ円形のプランであった。第３号土壙は、直径約0.8mのほぼ円形にプランであった。両土壙とも、覆土はロームの粒子を含んだ暗褐色土であった。遺物の出土はみられなかった。

第４号土壙（第16図）

JC98 16—31 Bb—42グリッド付近で検出されている。直径約0.9mのほぼ円形のプランであった。深さは約15cmであった。断面の形が皿のような形をしている。覆土はロームの粒子含んだ暗褐色土であった。また、覆土から縄文土器が出土しているが、小片のため実測図は載せられなかった。

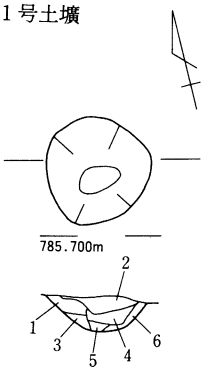
第５号土壙（第16図）

JC98 16—31 Bh—36グリッド付近で確認されている。楕円形に近いプランである。規模は長軸約0.9m、短軸0.7m、深さ約15cmであった。覆土はロームの粒子を含んだ暗褐色土であった。

第６号土壙（第16図）

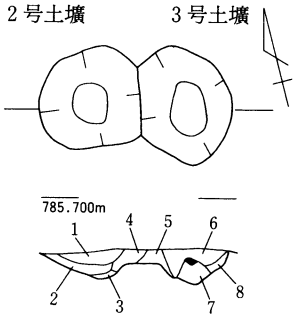
この土壙の北西に第２・３号土壙が存在している。JC98 16—31 Bi—35グリッド付近で検出されている。プランは不整円形をなしている。規模は長軸約0.8m、短軸約0.7m、深さ約10cmであった。覆土はローム粒子を含む暗褐色系の土であった。遺物の出土はみられなかった。

1号土壙



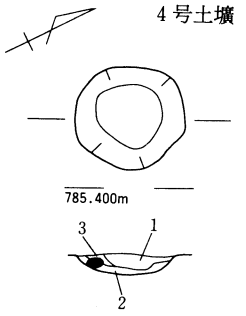
1：暗褐色土（黄色土粒まじる）
2：暗褐色土（黄色土粒まじる。
　　礫まじる）
3：暗褐色土（黄色小粒まじる）
4：暗褐色土（黄色小粒まじる。
　　礫まじる）
5：暗褐色土（黄色土粒まじる。
　　しまりあり）
6：暗褐色土（黄色土まじる。
　　黄色土粒まじる）

2号土壙　3号土壙



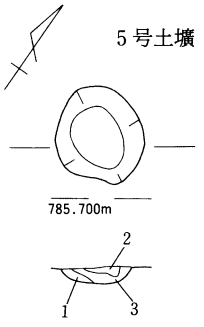
1：暗褐色土（やや褐色味おびる）
2：暗褐色土（黄色小粒まじる。しまりなし）
3：暗褐色土（黄色小粒まじる）
4：暗褐色土（黄色小粒まじる。炭まじる。
　　しまりあり）
5：暗褐色土（黄色小粒まじる。黄色味おびる）
6：暗褐色土（黄色小粒ややまじる。しまりあり）
7：暗褐色土（礫まじる）
8：暗褐色土（しまりなし）

4号土壙



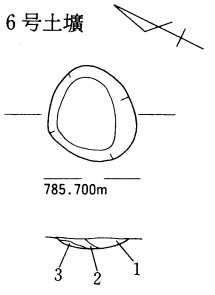
1：暗褐色土
2：暗褐色土（黄色小粒まじる）
3：暗褐色土（しまりなし）

5号土壙



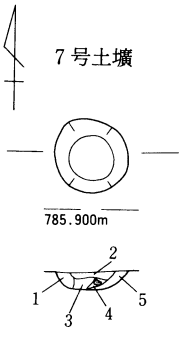
1：暗褐色土（黄色味おびる）
2：暗褐色土
3：明褐色土

6号土壙



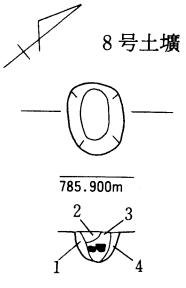
1：暗褐色土（黄色小粒まじる）
2：暗褐色土（黄色小粒まじる。
　　やや褐色味おびる）
3：明褐色土（黄色小粒まじる）

7号土壙



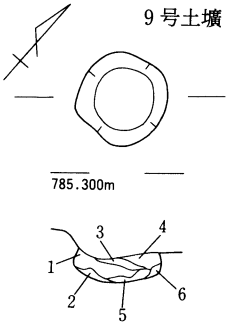
1：暗褐色土（黄色小粒まじる）
2：暗褐色土（やや黄色味おびる）
3：暗褐色土
4：暗褐色土（黄色小粒まじる。
　　礫まじる）
5：暗褐色土（黄色小粒まじる。
　　やや黄色味おびる）

8号土壙



1：暗褐色土（黄色小粒まじる）
2：暗褐色土（黄色小粒まじる。
　　しまりなし）
3：暗褐色土（礫まじる）
4：暗褐色土（やや黄色味おびる）

9号土壙



1：暗褐色土（しまりなし）
2：暗褐色土（黄色小粒ややまじる）
3：暗褐色土（しまりあり）
4：暗褐色土
5：暗褐色土（黄色小粒まじる）
6：暗褐色土（黄色土粒まじる）

0　1m

第16図　第1～9号土壙遺構平面図

第７号土壙（第16図）

JC98 16—31 Bm—34グリッド付近で検出されている。プランはほぼ円形をなす。規模は直径約0.6m、深さ約15cmであった。覆土は暗褐色系の土で、下層はローム粒子を含んだ暗褐色系の土であった。

第８号土壙（第16図）

南に第22号竪穴が隣接している。プランは楕円形をなしている。規模は長軸約0.6m、短軸約0.5m、深さ約25cmであった。覆土は暗褐色系の土であった。遺物の出土はみられなかった。

第９号土壙（第16図）

第１号焼土址の北西に検出されている。第１号焼土址を精査している中で出土した。JC98 16—31 Ba—44グリッド付近で検出された。プランはほぼ円形である。直径約0.8m、深さ約25cmの規模であった。ロームの粒子を含んだ暗褐色土が覆土であった。断面は袋状をなしている。遺物の出土はみられなかった。第１号焼土址との関係は不明である。

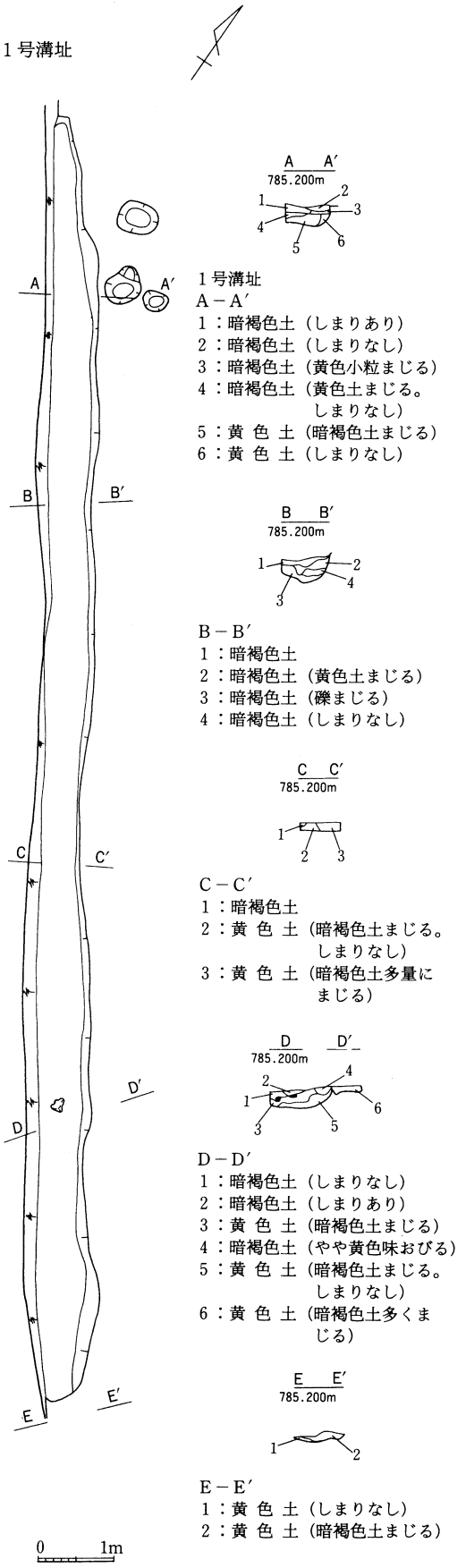
4　溝　　址

第１号溝址（第17図）

第13号竪穴の西壁を掘り込んで検出されている。長さは11.3m、幅は遺構の西側が調査区外になっているため不明である。確認されている範囲で、一番深いところが約25cmある。覆土は、ロームの粒子が混入した暗褐色土と、荒れた黄色土であった。遺物の出土がなく、いつの時代の遺構かは判断できない。

5　掘立柱建物址（第18図）

大庭遺跡では、多数の柱穴が確認されている。しかし、調査区が細長くて狭いため、柱穴を抽出した図で報告としたい。調査区の北西から、中央、南にかけ柱穴が多くみられ、南東部にはほとんど柱穴がみられなかった。柱穴がみられない理由は、重機などにより掘削されていることが考えられる。



第17図　第１号溝址遺構平面図

6　その他の遺物（第19図）

遺構外から出土した遺物を第19図に掲載した。

1は、灰釉陶器で碗の口縁部である。小片であるので反転復元をしている。JC98 16—31 Bc—39グリッドから出土している。釉薬は淡緑色で、内外面ともに薄く掛けられている。

2は、陶器の碗で排土内からの出土である。小片であったので反転復元している。口縁部周辺には内外面ともに薄く灰色の釉が掛けられている。

3は天目茶碗の高台である。カクランのJC98 16—31 Al—45グリッドからの出土である。内面には鉄釉が掛けられている。江戸時代の所産と思われる。

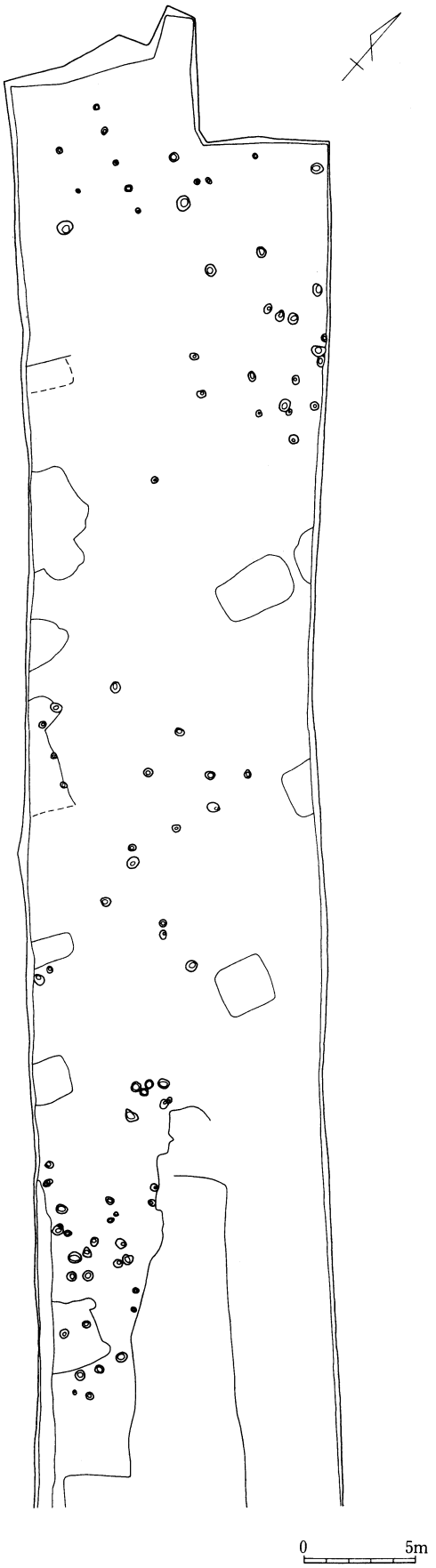
4は染付の碗である。JC98 16—31 An—10グリッドと排土内から出土したものが接合した。手描きで、呉須は淡い青色である。呉須のかかっていない部分は、乳白色であり、胎土は粗い。肥前系の磁器であり、江戸時代後期のものと思われる。

5は染付の碗であり、白い部分は4や6と比べ白い。手描きである。江戸時代末期の瀬戸・美濃である。JC98 16—31 Am—46グリッドのカクランからの出土である。

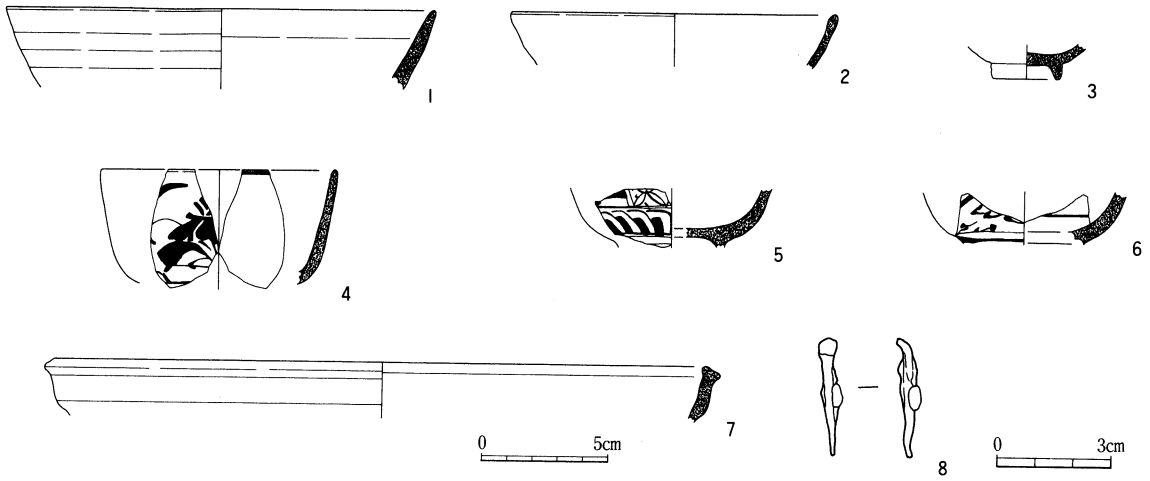
6は染付の碗であり、JC98 16—31 Aq—49グリッドからの出土である。4とは違い、呉須のかかっていない箇所は青みかかっている。唐草紋は手描きで描かれている。胎土は緻密であり、釉薬は厚く内外面ともに掛けられている。

7はすり鉢の口縁部であり、JC98 16—31 Aq—49グリッドからの出土である。江戸時代の所産と考えられる。

8は鉄釘である。JC98 16—31 Bd—49グリッドからの出土である。角釘である。



第18図　柱穴実測図



第19図　遺構外出土遺物（1～7：S＝⅓、8：S＝½）

第１表　大庭遺跡出土土器・陶磁器一覧表

番号	器　種	産　地	時　期	出 土 地	法　量			図版番号	番号	備　　考
					口径	底径	器高			
1	陶器・碗	瀬戸・美濃	中世後半	第１号堅穴					1	灰釉　体部一部残存
2	陶器・皿	瀬戸・美濃	中世後半	第１号堅穴		(6.2cm)		第５図-1	2	灰釉　口縁部と高台は破損
3	青磁・碗	龍泉窯	13～14c	第５号堅穴	(9.8cm)			第10図-1	19	口縁部一部残存
4	陶器・小壺	瀬戸・美濃	中世後半	第７号堅穴	(4.2cm)	4.0cm	4.0cm	第10図-2	15	灰釉　口縁部から体部にかけ破損
5	磁器		近代以降	第14号堅穴					23	染付　底部から体部にかけ一部破損
6	磁器		近代以降	第14号堅穴					24	染付　体部一部残存
7	磁器		近代以降	第14号堅穴		2.2cm			25	染付　底部一部残存
8	磁器		近代以降	第14号堅穴					26	体部一部残存
9	縄文土器		縄文中期	第13号堅穴					28	胴部一部残存
10	陶器・壺か	瀬戸・美濃	17c？	Br-32					29	灰釉？頚部一部残存
11	陶器・碗	瀬戸・美濃	中世後半	Bc-39	(16.6cm)			第19図-1	30	灰釉　口縁部一部残存
12	土師質土器		中世後半	As-4					31	内耳鍋片　底部一部残存
13	縄文土器		縄文中期	Ae-46					32	胴部一部残存
14	磁器・碗	肥前系か	近世か	Aq-49				第19図-6	33	染付　高台から口縁部にかけ破損
15	陶器・すり鉢		近世以降	Aq-49	(37.2cm)			第19図-7	34	施釉　口縁部一部残存
16	縄文土器		縄文中期	Ap-1					36	胴部一部残存
17	縄文土器		縄文中期	An-2					37	口縁部一部残存
18	陶器・碗		近世以降	An-2					38	施釉　体部一部残存
19	陶器		近世以降	Ai-5					40	施釉　体部一部残存
20	土師質土器		中世後半	Al-11					41	内耳鍋片　底部一部残存
21	磁器・碗	肥前系	近世後期	Ax-48					42	染付　口縁部から体部にかけ一部残存
22	陶器・皿		近世以降	As-0					43	施釉　口縁部一部残存
23	天目茶碗		近世以降	Al-5		2.7cm		第19図-3	44	鉄釉　底部残存
24	縄文土器		縄文中期	Ai-6					45	胴部一部残存
25	土器		近世以降	Aq-49					46	口縁部一部残存
26	磁器・碗	肥前系	近世後期	An-10				第19図-4	47	染付　№58と接合　体部一部残存
27	陶器・壺か	瀬戸・美濃	中世後半	Bp-34					49	灰釉　体部一部残存
28	磁器・碗	瀬戸・美濃	近世末期	At-49					54	染付　体部一部残存
29	縄文土器		縄文中期	Am-46					56	胴部一部残存
30	磁器・碗	瀬戸・美濃	近世末期	Am-46				第19図-5	57	染付 高台欠損 底部から体部にかけ破損
31	磁器・碗	肥前系か	近世後期	Am-46					58	染付　体部一部残存
32	磁器・碗		近代	Am-46					59	染付　底部一部残存
33	磁器・碗	肥前系	近世後期	Am-46					60	染付　口縁部一部残存
34	磁器・碗		近代以降	Am-46					61	染付　口縁部一部残存
35	磁器・碗	瀬戸・美濃	近代初頭	Am-46					62	染付　体部一部残存
36	陶器・碗		近世以降	Am-46					63	施釉　体部一部残存
37	陶器・碗		近世以降	Am-46					64	施釉　体部一部残存
38	陶器・碗		近世以降	Am-46					65	施釉　口縁部一部残存
39	磁器・碗		近代	カクラン					68	染付　体部一部残存
40	磁器・皿		近代	カクラン					69	染付　口縁部から体部にかけ一部残存
41	磁器・碗	肥前系	近世後期	カクラン					70	染付　体部一部残存
42	陶器		？	カクラン					71	施釉　頚部？一部残存
43	陶器・碗	瀬戸・美濃	中世後半	カクラン					72	灰釉　体部一部残存
44	磁器・碗		近代以降	堀尻					74	染付　口縁部から体部にかけ一部残存
45	磁器	瀬戸・美濃	近代以降	堀尻					75	染付？体部一部残存
46	磁器・碗	瀬戸・美濃	近代以降	堀尻					76	染係　体部一部残存
47	陶器・碗？		近世以降	堀尻					77	施釉　体部一部残存
48	磁器・碗	瀬戸・美濃	近世以降	堀尻					78	染付　口縁部から高台にかけ一部残存
49	縄文土器		縄文中期	一括					79	胴部一部残存
50	縄文土器		縄文中期	一括					80	胴部一部残存

番号	器　種	産　地	時　期	出土地	法　量			図版番号	番号	備　　考
					口径	底径	器高			
51	縄文土器		縄文中期	一括					81	胴部一部残存
52	縄文土器		縄文中期	一括					82	胴部一部残存
53	天目茶碗	瀬戸・美濃	中世？	一括					83	鉄釉　体部一部残存
54	陶器		？	一括					84	灰釉？底部一部残存
55	陶器・碗	赤羽	近代	排土内					86	施釉　赤羽焼　体部一部残存
56	陶器・碗		？	排土内	(13.2cm)			第19図-2	87	施釉　口縁部一部残存
57	陶器・碗		？	排土内					88	施釉　口縁部一部残存
58	磁器・碗	肥前系	近世後期	排土内	(9.4cm)			第19図-4	89	染付　口縁部一部残存、№26と接合
59	縄文土器		縄文中期	一括					90	胴部一部残存
60	磁器・碗		？	一括					91	染付？体部一部残存
61	磁器・碗		？	一括					92	染付？体部一部残存
62	陶器		？	不明					93	施釉　体部一部残存
63	磁器・碗	肥前系	近世後期	不明					94	染付　口縁部一部残存
64	磁器・碗	瀬戸・美濃	近代初頭	不明					95	染付　口縁部一部残存

(　)は推定

第2表　大庭遺跡出土金属製品一覧表

番号	種　　別	出土地	法　量			図版番号	登録番号	備　　考
			長さ	幅(断面径)	厚さ			
1	煙管	第1号竪穴	6.4cm	1.1cm		第5図-3	3	銅製品　吸口
2	毛抜き状鉄製品	第1号竪穴	(3.3cm)	0.3cm	0.8cm	第5図-2	4	鉄製品
3	角釘	第2号竪穴？	4.9cm	0.4cm	0.4cm	第8図-2	6	鉄製品
4	毛抜き状鉄製品	第2号竪穴？	8.2cm	0.4cm	0.7cm	第8図-3	7	鉄製品
5	鉄棒	第2号竪穴	(6.2cm)	0.7cm	0.6cm	第8図-1	10	鉄製品
6	角釘？	第3号竪穴	7.6cm	0.5cm	0.4cm	第8図-4	12	鉄製品
7	鎌	第3号竪穴	18.6cm	4.0cm	0.6cm		20	鉄製品
8	不明	第4号竪穴	5.3cm	2.2cm	0.5cm	第8図-5	14	鉄製品
9	角釘	第7号竪穴	10.2cm	0.8cm	0.7cm	第10図-3	16	鉄製品
10	不明	第7号竪穴	3.5cm	2.0cm	0.5cm	第10図-4	18	銅製品
11	不明	Aq-0					35	鉄製品
12	角釘	Bd-40	3.1cm	0.5cm	0.4cm	第19図-8	50	鉄製品
13	角釘	Au-49					51	鉄製品
14	不明	At-49					52	鉄製品
15	釘	Al-2					55	鉄製品
16	釘	カクラン					67	鉄製品

(　)は現存値

第3表　大庭遺跡出土銭貨一覧表

番号	銭貨名	出土地	初鋳年	直径	王朝	図版番号	登録番号	備　　考
1	熙寧元寶	2号竪穴	1068	2.6cm	北宋	第8図-6	5	
2	熙寧元寶	2号竪穴	1068	2.4cm	北宋	第8図-7	8	
3	元祐通寶	2号竪穴	1086	2.2cm	北宋	第8図-8	9	
4	天聖元寶	3号竪穴	1023	2.3cm	北宋	第8図-9	11	
5	不明	3号竪穴			不明		13	腐食が激しく銭種不明
6	紹聖元寶	7号竪穴	1094	2.4cm	北宋	第10図-5	17	
7	1銭銅貨	At-49	大正10年	—	日本		53	

第5章　ま　と　め

今回の調査では遺跡の範囲のごく一部を調査したにすぎない。遺構は調査区の北西部に集中しており、南東部には竪穴が少々みられただけであった。調査区南東側は、道の開削により、重機など大型の機械に掘削されていたために、遺構が検出されなかったと考えられる（第20図の斜線部分）

遺構を概観すると、第２号竪穴と第16号竪穴、第２号土壙と第３号土壙などが切り合って検出されているため、少なくとも２時期考えられる。一つの時期は、第１号竪穴と第７号竪穴から瀬戸・美濃の大窯II期だと思われる灰釉陶器が出土しているので、16世紀、戦国時代を想定することができる。出土遺物が大変少ないこともあって、もう一つの時期を決定する根拠はほとんどなく、16世紀より古いか新しいかもよくわからない。

遺構は竪穴が22基検出されているが、調査区の境に検出された竪穴が多く、全体の規模を把握できないものもあるが、確認されている大きさから推察すると大規模な竪穴はそう多くはないと思われる。本遺跡では、柱穴と考えられるピットも多数確認されているが、掘立柱建物の規模を把握するまでいたっていない。

遺物の出土量が大変少ないということも一つの特徴である。その少ない遺物の中で、金属製品が比較的多く出土しているのも特徴であろう。

今回の調査では残念ながら、大庭遺跡が宮所孫次郎の居館跡かどうか確かめることはできなかったが、戦国時代の遺跡の存在を確認できたことは収穫であった。末筆ではありますが、調査に係わった皆様方に感謝を申し上げたいと思います。

参　考　文　献

黒板勝美他編　1980「吾妻鑑」『増補新訂国史大系』（吉川弘文館）

佐藤進一　1974『日本の歴史９　―南北朝の内乱―』（中央公論社）

信濃史料刊行会　1972「上諏方造営帳」（『新編信濃史料叢書』第２巻）

信濃史料刊行会　1972「守矢満実書留」（『新編信濃史料叢書』第７巻）

信濃史料刊行会　1976「神使御頭之日記」（『新編信濃史料叢書』第14巻）

辰野町誌編纂専門委員会編　1989『辰野町誌―自然編―』

辰野町誌編纂専門委員会編　1990『辰野町誌―歴史編―』

辰野町教育委員会編　1986『上の山遺跡』

辰野町教育委員会編　2000『堀の内居館跡』

中世土器研究会編　1995『概説中世の土器・陶磁器』（真陽社）

長野県史刊行会　1988『長野県史　通史編　中世２』

(財)長野県埋蔵文化財センター　1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書１　―軽井沢町内・御代田町内・佐久市内・浅科村内―　県　県西南部　池尻　小田井城南部台地　唄坂　金井城跡　中金井　栗毛坂　下蟹沢　長土呂　常田居屋敷　前田　砂原　中平　田中島　土合遺跡』

(財)長野件埋蔵文化財センター　1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４　―松本市内―　総論編』

長野県　1986年版『長野県町村誌』＜中・南信版＞（郷土出版社）

写　真　図　版

1. 発掘調査前風景

2. 発掘調査風景

図 版 2

1. 遺 跡 全 景（北西より）

2. 遺 跡 全 景（南東より）

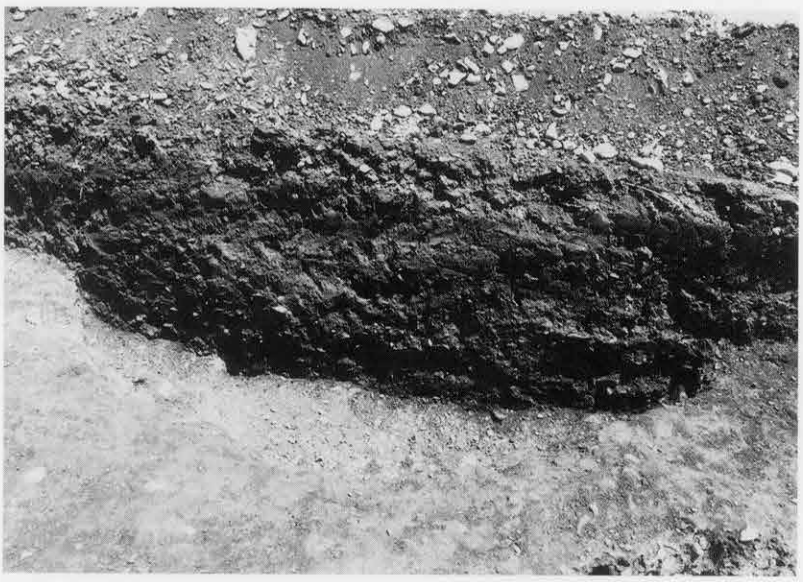
1. 第1号竪穴

2. 第2・16号竪穴

3. 第3号竪穴

図 版 4

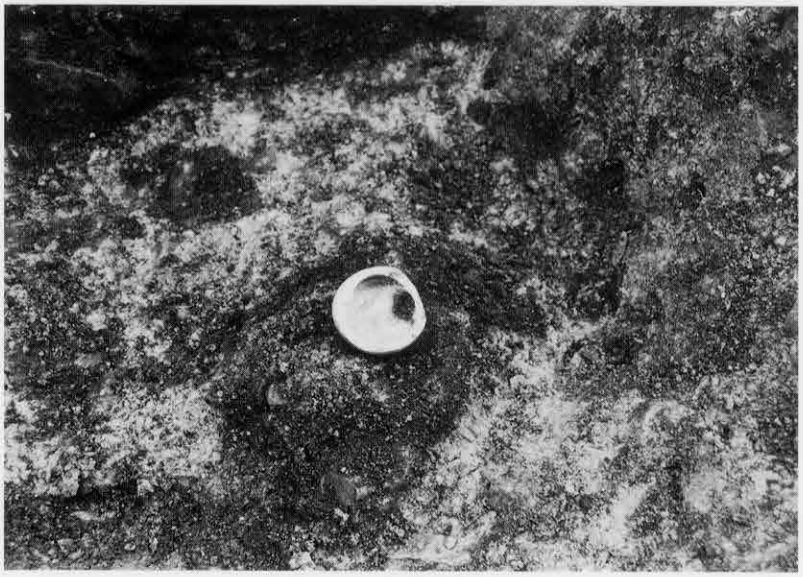
1. 第17号竪穴



2. 第6号竪穴

3. 第8号竪穴

1. 第7号竪穴



2. 第7号竪穴出土遺物

3. 第9号竪穴

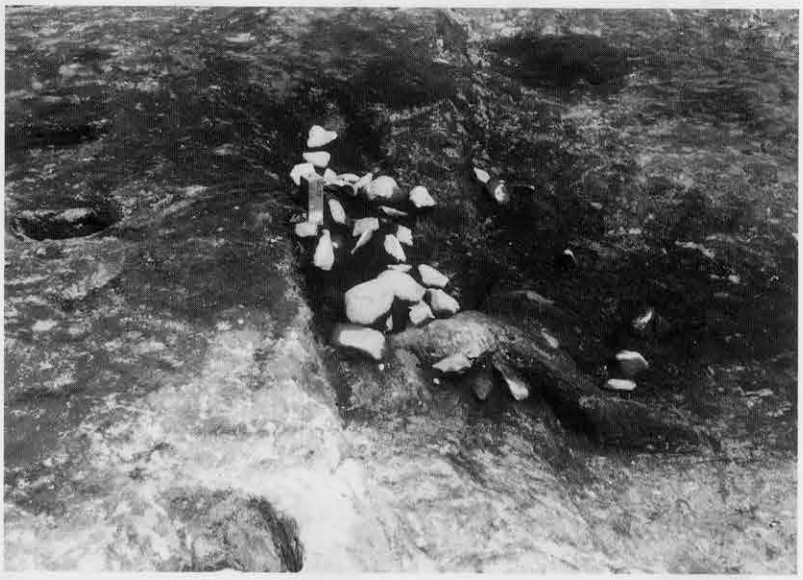
図 版 6

1. 第10号竪穴

2. 第11号竪穴

3. 第13号竪穴

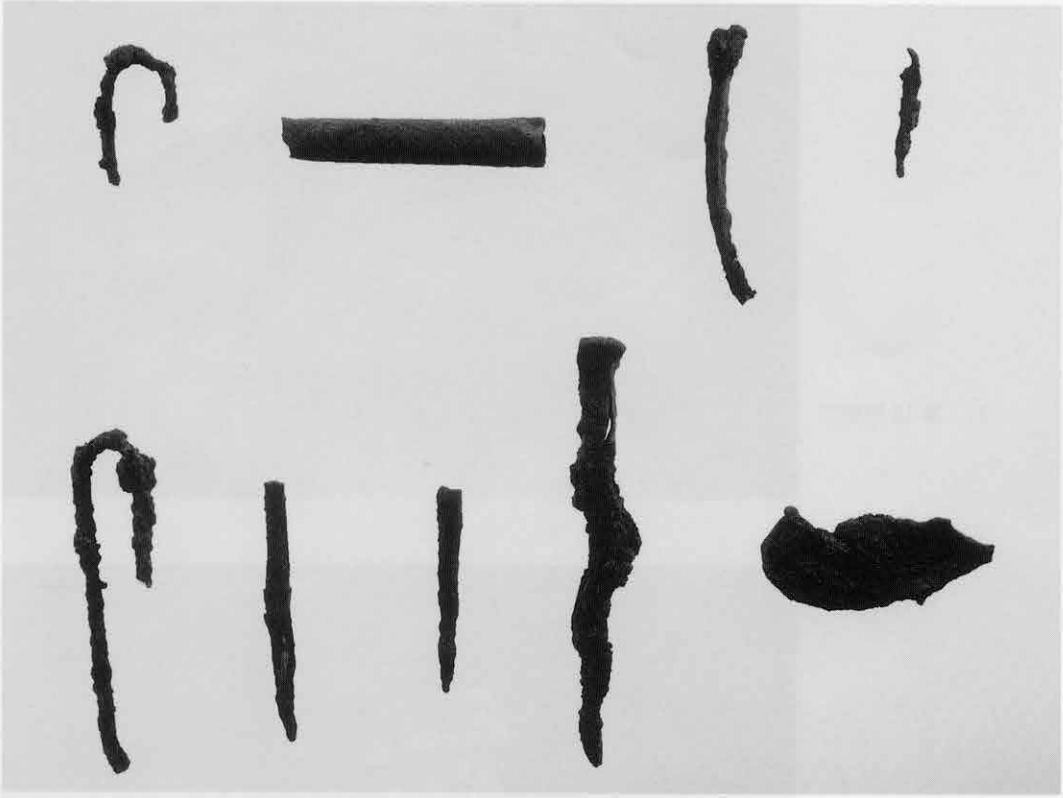
1. 第15号竪穴



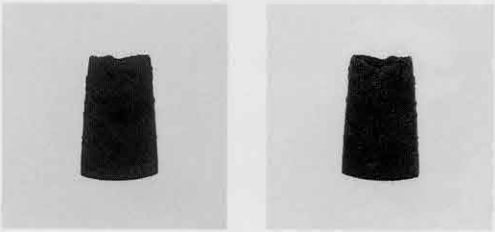
2. 第1号焼土址

3. 第1号溝址

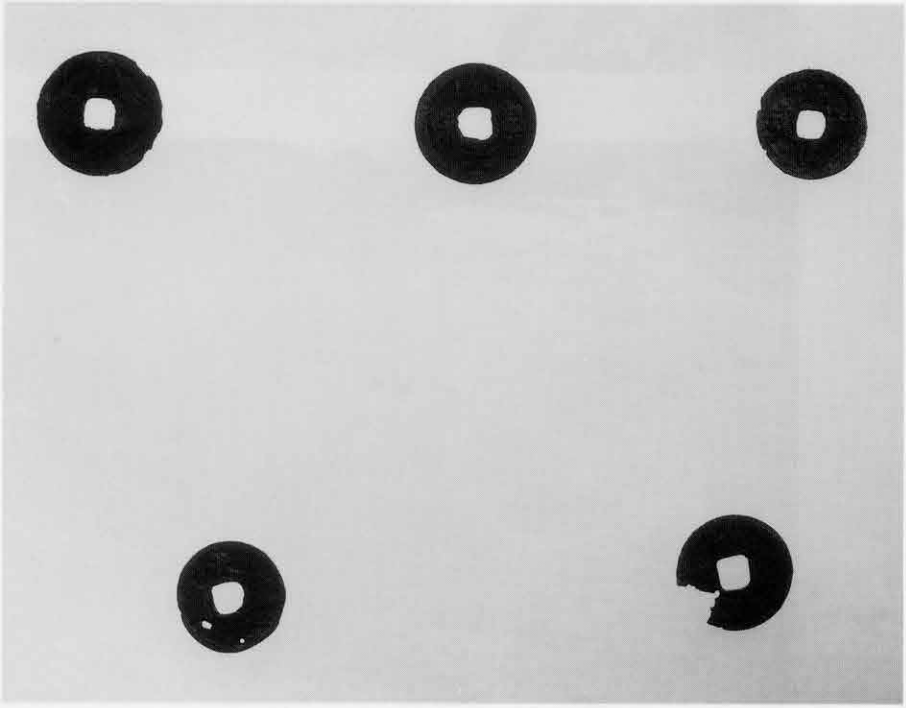
図 版 8



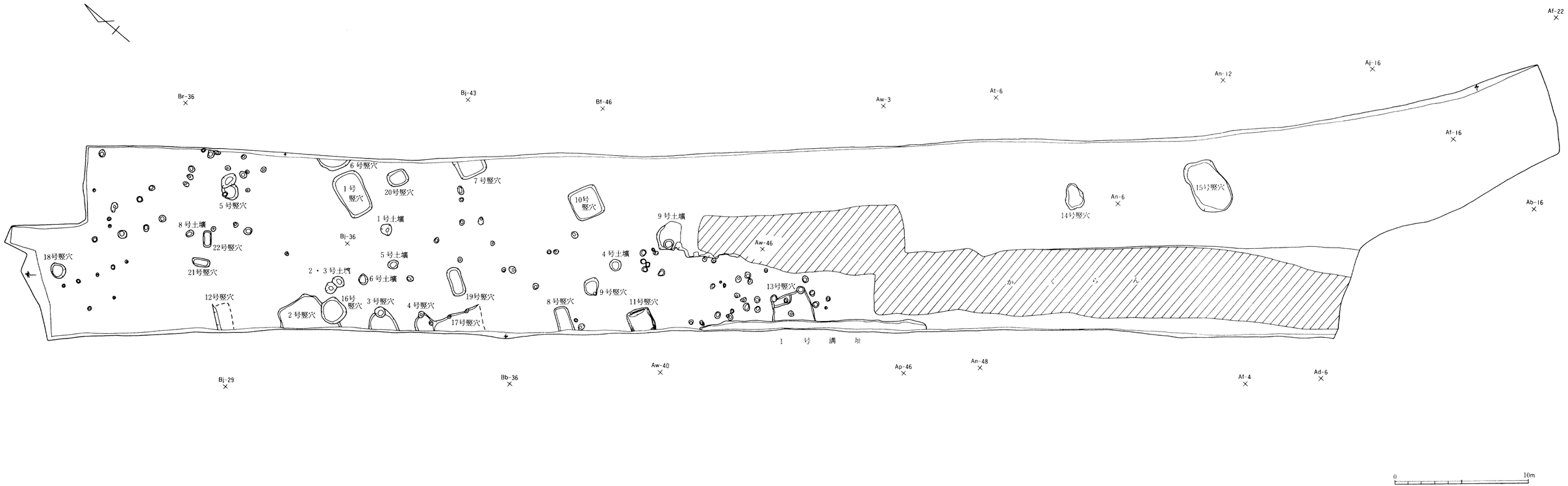
1. 遺跡出土金属製品



2. 第7号竪穴出土銅製品



3. 遺跡出土銭



第20図　大庭遺跡全体測量図　S＝1/200

報告書抄録

ふりがな	おおにわいせき
書名	大庭遺跡
副書名	特別擁護老人ホームかたくりの里建設に伴う発掘調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大木丈夫
編集機関	長野県辰野町教育委員会
所在地	〒399-0493　長野県上伊那郡辰野町中央1番地　Tel　0266－41－1111（代）
発行年月日	2002年3月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
大庭（おおにわ）	長野県上伊那郡（ながのけんかみいなぐん） 辰野町大字上島（たつのまちおおあざかみじま） 2126－1外	20382	33	36度 00分 23秒	137度 58分 30秒	19990410 ～ 19990605	3,000㎡

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大庭	散布地	中世	竪穴遺構　22基 土坑　10基 ピット　多数 溝状遺構　1条 焼土址　1基	瀬戸・美濃系陶磁器・鉄製品・銅製品・銭貨等・縄文土器

特記事項	大庭遺跡は鎌倉時代の豪族宮所孫次郎の居館の推定地であったが、居館跡と断定するにはいたらなかった。しかし、今回の調査で戦国時代の遺跡であることが判明した。宮所孫次郎の居館跡はどこに所在したかは今後の検討課題となった。

大 庭 遺 跡

—特別擁護老人ホームかたくりの里
建設に伴う発掘調査報告書—

発行日　平成14年3月29日

編集
発行　辰野町教育委員会

〒 399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1
電話 0266 (41) 1111

印刷
製本　もえぎ企画書籍

〒 394-0043 長野県岡谷市御倉町2-21
電話 0266 (22) 4892